明治二十六年五月十五日發行

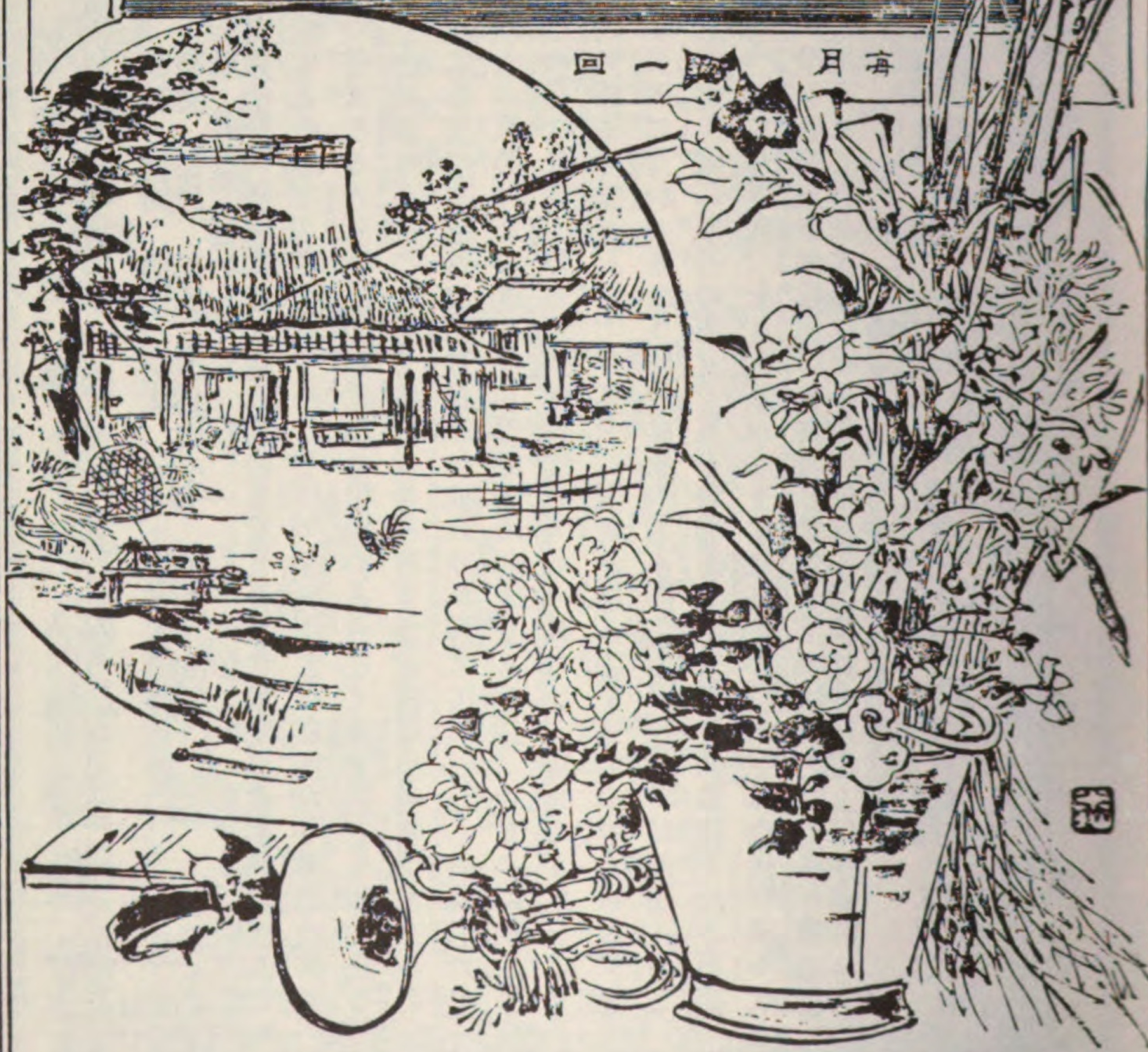
THE HOME MAGAZINE

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

毎月一回



第九號

佛國ブーミー著　深井英吾譯

英米佛比較憲法論

定價金二十錢　郵税金四錢

○英米佛比較憲法論は萬國憲法中尤も發達せる英米佛三國の憲法の精を抜き粋をあつめ比較酌量して論述したるものにして今後愈善美なる立憲政治を擁立す可き山の如き責任ある我國民の必一讀す可き所也

○英米佛比較憲法論は佛國政治學大家ブーミー氏の原著にかゝり曾て我憲法制定の時に當り其著書は頗る當局者の參考に供せられたりとの評ある英國政治學の泰斗ダイシー氏の如きは之を激賞し特に夫人に命じて英譯せしめし程なれば價値は不言の中に明らかならん

○英米佛比較憲法論は原文極めて簡潔明快譯文亦直截簡明を旨としたれば普通法律書の如く詰屈聱牙無味乾燥砂を嚙むが如き患なく何人も快誦流讀以て其妙味を了す可し讀者親く卷に對して其然るを知れ

發兌元　東京　民友社

櫻痴居士福池源一郎著

再版

幕府衰亡論

三百四十二頁　定價三拾五錢　郵税六錢

明治年間の一大雄篇として、議論の明快、事實の斬新、**世論**既に確として**定る**、是れ文章の清麗暢達なる者の續々として絶えざる所以也。

經濟雜誌の之を評して、「櫻痴居士キツボンの羅馬衰亡史を讀み深く感する所あり、以て幕府衰亡史を著はさんと欲す、而して其志を爲す能はず先づ此編を著はして以て其骨子を示すと云ふ、余之を讀み、能く其要を得たるを見るなり、蓋し居士の文章明治の文學上に於ては先鋒と稱すべし、然れとも其文多く日々新聞に載せたる時文なるを以て後世に至りては之を顧みざるべし、余輩私に之を惜みたりしに此編出つるに及ひて居士の文初めて傳ふべし、而して其概括明斷の力亦た後人批判の資とならん、豈に快ならずや、蓋し近時幕末を紀するの書多し、然れども能く纖細に其事情を悉すに至りては**居士の筆に及ふものなかるへき也**」と謂へるもの、決して諂諛にあらざる也、決して溢美にあらざる也

發兌元　東京市京橋區　民友社

第三 國民小説

一冊定價拾五錢　郵稅四錢

第三國民小説には左の諸家を收めたり

●霜柱……饗庭 篁村
●吾亡妻……宮崎 三昧
●明月……抱 一 庵
●夏夜がたり……敬亭 居士
●雛嫁……若松 賤子
●女丈夫……鷗外 居士
●用達會社……思軒居士譯
●村落小記……湖 處 子
●巨人石……麗 水 生
●宿魂鏡……透 谷 士
●老人物語……愛 山 生
●迷の夢……櫻痴 居士

文華爛熳すべて是れ喜ぶべく愛すべく樂むべく親むべきもの。

三版

第二 國民小説

定價拾五錢
郵稅六錢

右品切の處今般三版出來せり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

九版

宮崎湖處子著

歸省

全一冊
定價十五錢
郵稅四錢

歸省は現時清文學の祖なり彼は其純潔なる思想清越なる詩趣流麗なる音調を以て廣漠なる文學界を征服せり彼が世に出しより今に三年人間の齡を以てすれば正に三百年の長壽を保ち版を改むると九回須つ所殆ど二萬部の多きに垂むとして江湖の需要猶ほ續々として盡きざる者は啻に江湖の彼を愛するの深きに由るのみにあらず抑亦彼が江湖に表する同情の如何に温かなるかを見るに足る、彼は既に家庭、學校、旅行、客舍、到る處の社會に伴はれ彼を讀むものは文學趣味あると否とを問はず皆其慰籍、興味、利益を受け滔々たる流勢、今や歸省を讀まざるものは書生に非ずと云ふに到れり。凡そ其の名を聞て未だ之を得るに及ばざる江湖の諸彥後れ來りて悔ると勿れ

五版

一語千金

定價五錢
郵稅二錢

大人、豪傑、烈士、哲家の音容に接するは品性修養の第一着歩たり、而して此の一語千金こそ實に此の目的を達する最近手段也、一讀せよ、

家庭雜誌定價表

	前金	地方郵税共
一冊	五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾三錢
十二冊	金五拾錢	五拾六錢

廣告料 二拾四字行數回數に付割引無 八錢

本社は前金にあらされば發送せず爲替は芝口郵便局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割増しの事

發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十六年五月十五日發行

家庭雜誌第九號

目錄



家庭雜誌第九號

（明治二十六年五月十五日發兌）

社説

内職、一家老幼各々その職業に就くを要す

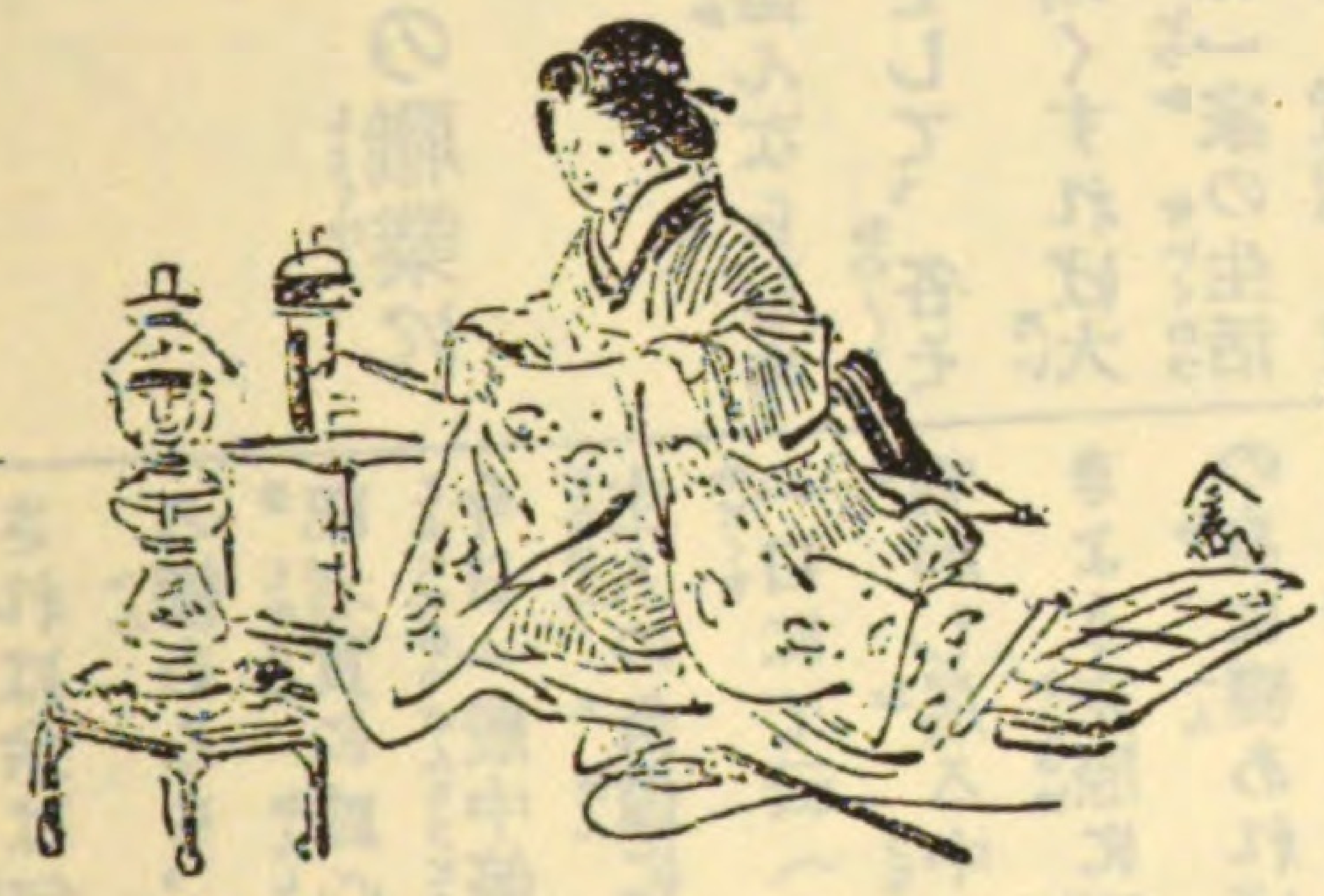
大隈伯申されけるは、我邦に何卒内職を盛んならしめたきものなり、内職とは一家の子女老幼をして、各その分に應じ、それ〳〵の仕事をなす也。斯くすれば大にしては一國の富を進む可く、小にしては一家の生活を扶く可し、人各〻その仕事あれば苦情も面倒も起るまじ、一家の幸福此の中より生ぜんと、記者實に尤と思へり。

記者の友人に某會社の取締あり、三十萬圓以上の大會社の取締なり。その人申す樣、余の家は余が會社より受け取る俸給にて暮らさす、從前より成し來りし豆腐屋にて暮らし居る也。此れは余が細君の仕事として。されは余は何時會社を辭しても、又た余が身に如何なる變あるも、一家の生活には、決して差支なきなりと。記者實に感心せり。

今日一般中等社會に於ては、一家の生活は、全くその主人の負擔にして、その他の家族は、少しも頓着なく、一口にて云へば、先づ厄介物の姿なれば。主人が幅を利かし居る中は、一家何となく春めき、日々の暮し向きより交際に到る迄、中々大層なれども、一たび主人の身に變あれば、時ならぬ秋は來り、一家老少手を束ねて泣き入るの外なく、僅かに家屋敷を賣り、諸道具を賣り、微かに一家の糊口を繋ぐものあり。中には身代富裕にして左程の心配なきもの迄も、兎角一家生活の責めは、獨り主人の肩の上にのみありて、家族は一

切關係せぬ事は、上等社會になればなる程、益々甚しきが如く覺ゆ。されば上等社會の家族程、その權力は概して薄く、實に錦を着たる乞食とも云ふ可く、憐む可き情態なりとす。

下等社會は然らず、裏店の細君達は、マッチ箱を張るやら、團扇の骨を削るやら、ハンカチフの耳を縫ふやら、石版畫の彩色をなすやら、色々の仕事あり。彼等は必らずしも主人の厄介物にあらず、主人仕事より歸れば、夫妻一ツ膳に差し向ひ、欣々然として鮭の鹽引、鰯の煮付、以て一日の樂を全ふす。吾人は人生の幸福、實に此の中にあるを信ず。



上州信州は最も婦人の勢力多き地方なり、何となればその婦人は、多く蠶絲業に關して、一人前の仕事をなし居れば也。此によりて考れば、勞作せずして勢力を得るの道は決して是れあらずと知る可し。

吾人は一家の生活のみならず、幸福を維持する上よりしても、内職の大切なるを疑はず。何となれば、（一）主人の身に異變あるも一家安全なるを得可し。（二）家族をして各其の職を得、厄介物たらしめざるが故に、その權力に於ても偏重偏輕の憂へなかる可し。（三）人々各その仕事をなすが故に、假りにも驕りがましき事はなかる可し。（四）仕事あれば不善を思ふの間もなく、喧嘩する隙もなく、苦情も、風波もなかる可し。（五）仕事をなす時には、規則立つ事、順序ある事、欺く可らざる事、誠實なるべき事、總て平民的道德は、教へずして習ひ、學ばずして得ん。

故に吾人は上等社會と中等社會と下等社會に論なく、此の內職の風を盛ならしめんことを願ふ。上等社會の如きは慈善の業に、此の內職より得たる金錢をば抛つ如きは、最も功德ある業と云ふ可し。

漢の文帝の言葉に、一夫耕さゞれば、必らず饑るものあり、一婦織らざれば、必らず凍るものありと。又た我邦の皇后陛下は御所內に蠶室を築き給ひ、自から蠶兒を育し給ふと承る。且つ英國女皇の如きも、世界第一の富を有し給ふに係らず、皇子皇女の靴足袋は、自からその破れを補綴し給ふと承る。共に是れ欽仰すべき到りならずや。聞く米國にては、その小兒が自から鷄を養ひ、その卵を賣りて、以て學資に供すと、吾人は之を聞いて、米國の富强の決して偶然ならざるを見る也。我邦の國風も何卒斯くあり度きものにあらずや。內職は儉勤の基ひ也、儉勤は國家隆盛の基ひ也。

史談

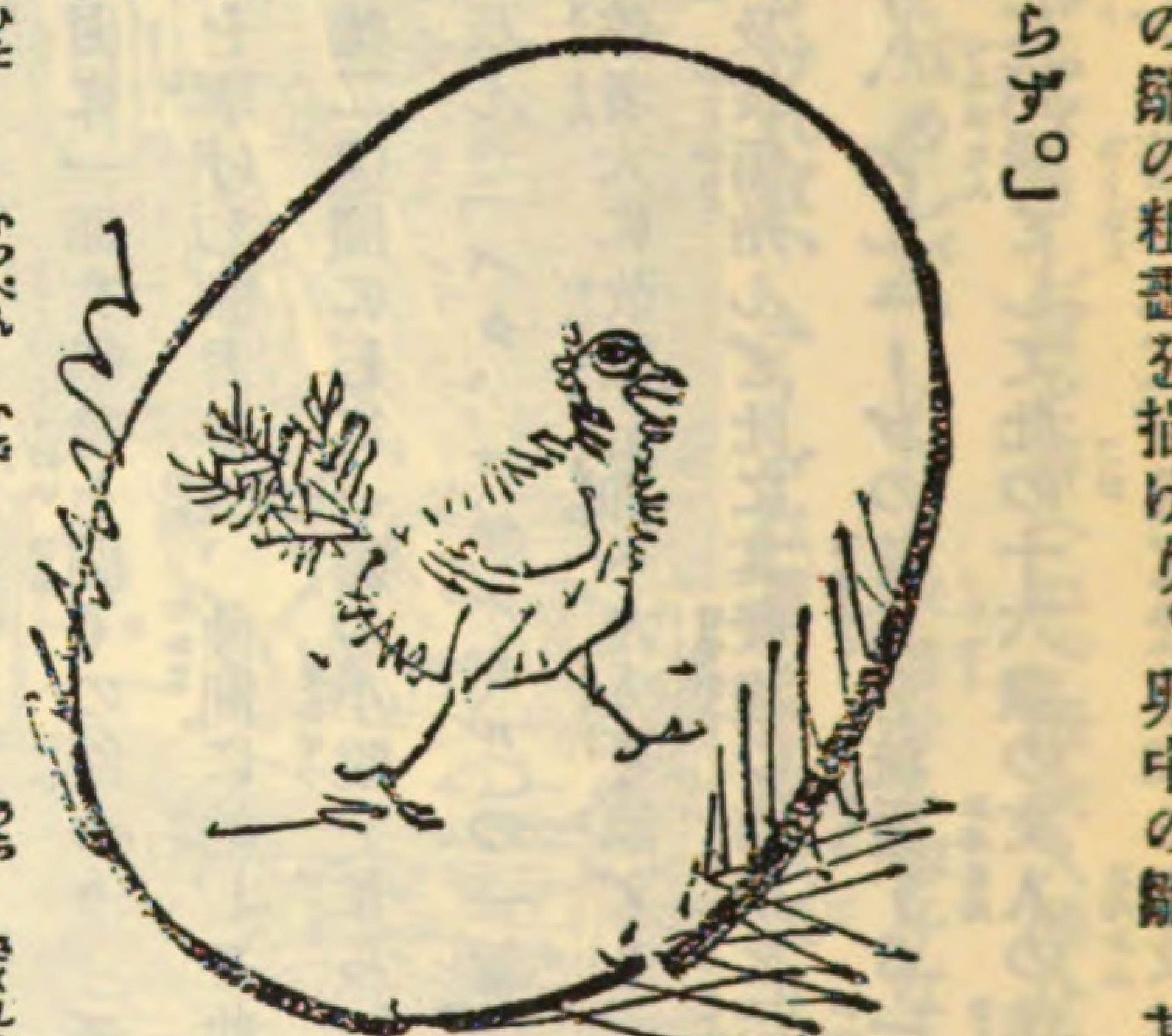
ユーゴの少年（續）

奈破烈翁朝倒れて路易十八世の代となり、ユーゴ兄弟はコルヂエー學館に入れり。時に兄ユーゼンは十五歲、弟ユーゴは十三歲、共に血氣盛りの少年にて、入校するより早く二人は仲間の王となり、ユーゼンの組を牛組と稱し、ユーゴの連を犬連と名け、兩雄並び立ち難くして劇戰に及ぶことしば〱也。老年のユーゴは自由家の骨頂なりしも、少年のユーゴは路易十四世も三舍を避くる壓制家にて、少しにても吾命に背く手下は鞭韃蹈蹴毫も恕する所なく、後年有名の音樂家となりしレオンガタヤの如きはユーゴよりも年長なりしが、日々二スー丈の意太利チーズを半ば乾きたるもの半ば濕へるものと別ちて買ひ來る可き命を受くるに、若

し誤て濕牛酪のみなれば王ユーゴ陛下は亂拳を其使臣の肩上に雨ふらし、若し亦乾牛酪のみなれば散々に脛を蹴ること常なりし。五十年の後レオン笑つてユーゴに語て曰く、御身は彼頃の事を記臆するや、余か脛は今に猶痛きなり」と。

ユーゴ諸の科に於て成績よく、數學の如き亦尤も其長ずる所にて、其の問題を解釋するや尋常定規の道によらず、自ら一種奇妙なる前人未踏の道を開拓してめぐり〳〵て結局に到るを喜べりと。然もユーゴの尤も好める所は何よりも先づ詩にありき。此頃天下一般に作詩の流行あり、學校の教師も生徒も皆詩神を崇拜し、ユーゴの如きも天來の詩才時勢に皷せられて只管詩に熱中し、韻法を知らざれば自ら之を發明して短詩長歌手に任せて拈出し來れり。獨り詩のみならず、學校の年少詩人等は大戯曲を作り出し、廣き教場にテーブルを並べて舞臺とし、テーブルの下を樂屋とし、紙を切りて勲章を作り、石彈を繋ぎてエポウレットとし、さま〴〵の服裝器具を備へて眞面目に大芝居を興行せり。而して其尤も熱心なる者はユーゴにして、氏はモリエルを手本として戯曲を書き、常に重なる役を己に當てはめたり。また遊歩時間中此等の戯曲を書き且演ずるを以て滿足せず、夜の眠を節してホーレスヴァヂルの詩を佛語に翻へせり。此頃牛組犬組の劇戰に於て、敵の一卒敗北を憤りて窃かに手巾に石を包み犬組の大將ユーゴを打ちて其足に當て、ユーゴの疵重ふして一時は其足を截斷せざる可からざる摸樣なりしが、ユーゴは終に己を打ちし少年の名を漏さず、苦痛非常なりしも却て此偶然の閑暇を幸として病中ありとあらふる詩文を作りて慰みたり。後年ユーゴ夫人ユーゴの傳を叙せんとして舊篋を搜せしに、ユーゴ十四五歳の頃の詩を集め書したる謄寫本十冊ばかり發見せり。其表紙に猶幼なき手して「吾生れし前に書きつるたは言」と

書き、其下に卵中の雛の粗畫を描けり。卵中の雛、其意羞し窺ふに難からず。」



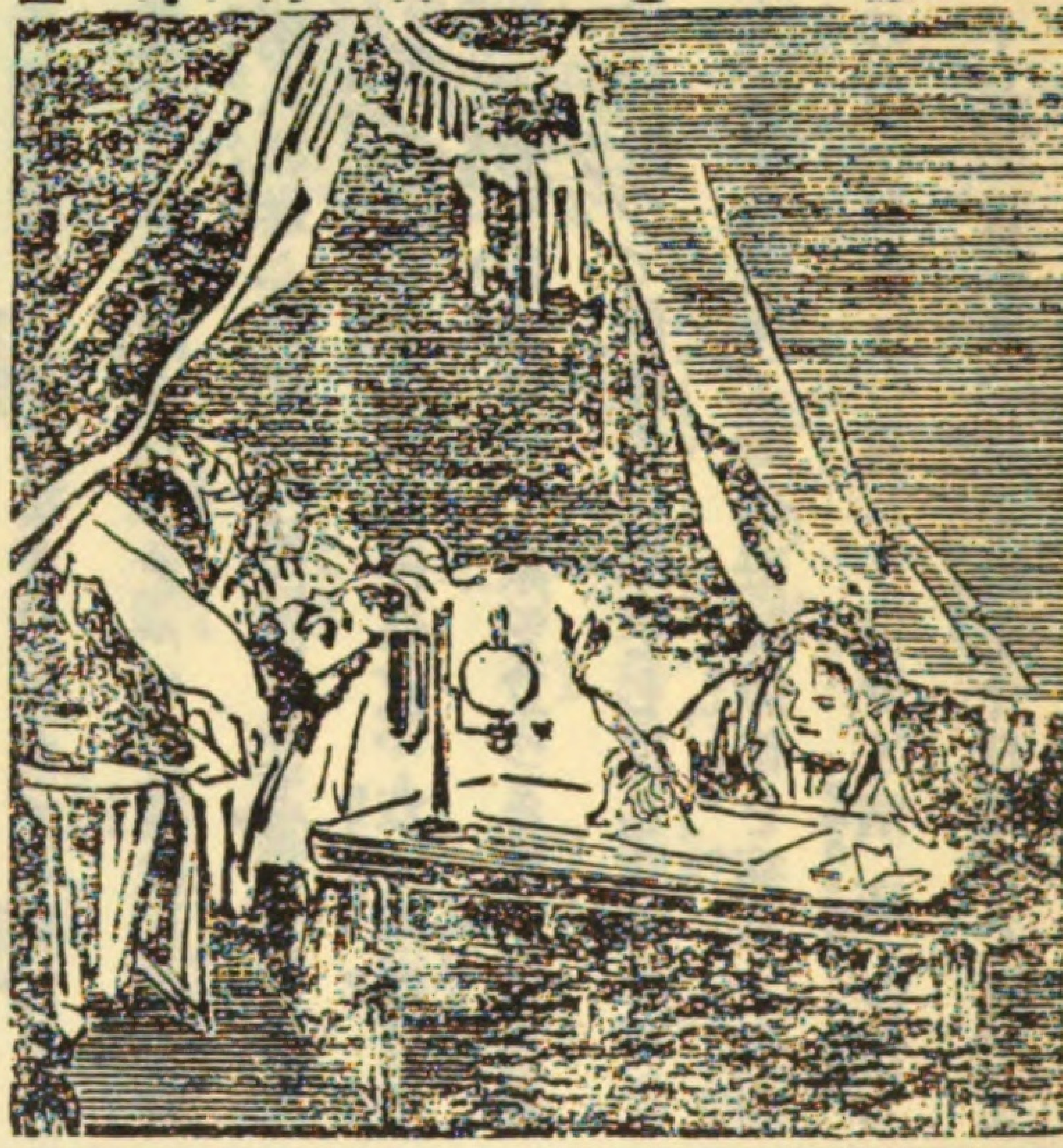
千八百十七年佛國學士會院「社會諸の位置に於ける學問の利益」と云へる題を擧げ、賞を懸けて詩を募る。コルチエー學舘の少年詩人も亦竊かに一篇を出せしが、其内に作者自ら齢未だ十五を過ぎざるを云へるの句ありしかば、學士會院諸の寄送詩篇を閲して此一篇に到るに及び、其詩の妙其年の幼きに似ざるを怪しみ、十分優等に上るの價あるを認めつゝも「オノラーブル、メンション」を與へしのみにて已みぬ。既にして學士會院に於て公衆の前に各詩篇を朗誦するに及び、尤も喝采を得たるは即ち優等に漏れたるユーゴの作なりき。兄ユーゼン走て此事を其弟に報ずれば、十五の詩人は同輩と打球の遊びまさに闌に、報を聞くも猶其遊戯にのみ耽りたり。暫らく程經て學士會院の報告書出でしに、其内にユーゴー氏果して其自ら云へる如き年配ならんには學士會院は宜しく斯る年少秀才を奬勵す可きものなりとの一句ありしかば、ユーゴの母氏は大に憤り、學校に來りてユーゴを引連れ其誕生證明書を懷にして學士會院の書記を訪ひしに、書記ユーゴを見て舌を吐きて驚嘆し、當時佛國隨一の文豪たるシヤトオブリアンは叫んで「斯兒實に偉なり」と云ひ、是れより「偉兒ユーゴ」の名は佛國に傳はりぬ。シアトオブリアンはユーゴの固より敬慕措く能はざりしところ、此頃其科業書の端に「余はシアトオブリアンたらんことを欲す、其他は言ふに足らず」と落書したるを見れば、其尊敬せる先進者の一言の褒辭は如何にユーゴの心膓にシミ

渡りしか、察するに餘あらむ。亦「偉見」の名の一般に廣まりしことは、此三四年後ユーゴ偶ま事によりて未知の一兵卒と血鬪を爲して左肱に深き疵を受けしに、傍人其兵卒に向ひ疵つきたるは彼の「偉見」なることを告げしかば、兵士は汪然涙を流して「若しそれと知らば、彼に吾躰を刺透させたらむものを」と嘆ぜることを見て知る可き也。

ユーゴの學校仲間月に一回文學會を開くの例あり。ユーゴ學士會院に名を擧げし數月の後、仲間に約して此文學會の間に合ふ樣二週間にして一篇の小説を作らむことを誓ふ。期に及んで「バク、ジャルガル」の一篇果して成れり。後年作者大に改竄を加へたりと雖ども、ユーゴ一生の觀念及技倆殆んど此に其發達の初期を示せるものと云ふ可く、大凡ユーゴの著作を流通する一片獻身的精神は實に炳焉として此の十六歳の文人の作に耀やけり。ユーゴの著作にて、まとまりたる散文は此篇を以て初とす。思軒居士の譯に成れる「懷舊」の篇は即ち改竄を經たる「バグ、ジャルガル」なり、委敷は就て見る可し。此一篇を學校に於ける最後の作として、千八百十八年八月ユーゴ兄弟相携へて母の家に歸りぬ。

ユーゴの父は奈破烈翁黨のカタマリなるに、母は尤も熱心なるブルボン黨なれば、議論常に合ふ時なく、奈翁の朝倒れし頃より終に夫妻別居することゝなり、ユーゴ兄弟は專ら母の保護の下にありき。母は尤もユーゴに眼をかけ、固く其將來天下に名あらむことを信じ、奬勵誘掖到らざる所なかりし。千八百十九年二月ユーゴ夫人偶ま肺焮衝に惱み、ユーゴ兄弟代る〲夜伽を爲す。此月五日の夜、ユーゴ番に當りて母の病床に侍せり。此頃ヘンリー四世の像をポントヌーフに設くるに付て懸賞募詩の擧あり、寄送の期限は恰も六日を以て盡くるの定めなり。母夫人傍らに侍したるユーゴ

を顧みて、詩は已に發送したるならんと云ふ。ユーゴは事多くして得作らざりし旨を答へぬ。母夫人聞ひて言少なにユーゴを戒めしが、いたく失望せる容子なりき。斯くて母眠りければ、ユーゴは直ちに筆紙取り出して詩作にかゝり、徹夜燈下に一篇の長歌を草し終て、明朝母の眠さむるを待ちて之を母の手中に置きぬ。一篇の詩稿先づ母の涙に濕されて然る後に送られ、終に優等の賞を受けたり。母の奬勵と天成の才によつてユーゴは學校を出でゝよ



り間斷なく文學上の修練著作に餘念なく、しば〳〵賞を得、名聲早くも已に揚りぬ。ラマルチン如き有名の文士亦來つて交を此少年文人に結びぬ。ラマルチン後年初めてユーゴを見たる時の事を記して曰へらく、思へば猶昨日の事の如し、ドロハン公爵余が宅に來りて「余と共に來りて佛國の一偉人たるべき望を示せる一現象を見よ、シャトオブリアン已に彼を偉兒と名けぬ、君は他日柏樹を橡實の時に見しことを祝するの日ある可し」と云へり、余は公爵に從つて出で立ち間もなく街角の目立たぬ家の底層に到れり、此處に愼重沈欝なる母長幼さま〳〵の男兒を敎へ居れり、此れ彼女の子供なり、彼女は我等を少し離れたる低き部屋に導きぬ、此室の一端に立派なる巨大の頭を有する聰明にして思慮深げなる一少年讀み若くは物書き居れり、此れ今や一枝の筆世を樂まし世を驚かすヴィクトルユーゴ其人なりき」と。

學校を去つてよりユーゴしば〳〵母に從つてフオセー家を訪いぬ。フオセー家は即ちアデルフオセー女の家也。當年鳥の巣を爭び林檎を爭ふて喧嘩をなせる十一二の小兒今や秀俊なる少年となり、リボンの美しきを誇り小鳥の愛らしきを語りしアデルも亦美はしき少女となりぬ。兩人相逢ふ毎に、口云はずして眼自ら言ひ、騒げる胸は紅の面の色に出でければ、双方の親は少年少女の齡の猶弱く財產の以て家を立つるに足るなきを慮りて、相計つて兩家の往來をしばし止めぬ。

千八百二十一年六月ユーゴの母肺焮衝を病みて衰弱甚だし。月の廿七日ユーゴ兄ユーゼンと病床の傍らにあり。ユーゼン言へり、見よ母上今日はすぐれてよろしきを、斯く靜かに眠り玉ふことは近頃珍らしきにあらずや」と。ユーゴ「然り、程なく全快し玉ふ可し」。言終つて俛して接吻すれば、母の額は氷の如し。母は眠りより長き眠に逝きしなり。

母を葬り了りし其夕、ユーゴ悲に堪へず、歩むともなくフオセー家の邊に到りて窓より望み見れば、彼少女はまさに花の冠きて舞ひ躍るに餘念なし。此日は彼女の誕生日にて、其家族はユーゴの母の亡せにし事を未だ彼女に隱くせるなり。明くる日ユーゴ再び其家を訪ひてアデル女に花園の中に會ひぬ。ユーゴの色眞蒼く悲傷の面に溢れたるを見て、彼少女は走せ寄りて其故を問ふ。ユーゴ「昨日余は母を葬りぬ」「「母上を葬れりと！シテ昨日妾は舞ひ躍り居りしを」。彼此共に流せる淚は、即ち二人の契約なりき。

我等は此處にユーゴを殘し置くべし。此れよりユーゴが骨を刺す困苦貧窮の間を凌ぎて自家の針路を切り開き、少年の名聲は老年に到てます〳〵加はり、文學者としてはローマンチック派の勇將として名篇名篇のあとをついで出で、政治家としては進歩の友自由の楯となりて、赤手三世奈翁に抵抗し、同胞の友としては社

會の大渦に埋沒せらるゝ下層の民の爲めに心血を注ぎ、佛國をしてユーゴあるを誇らしむるに到りし六十餘年間の事は、其はまた機會を得て叙する時ある可し。

（完）

科學



科學者の昔の夢

科學者が安樂椅子を備へて坐せる室は、彼が有する唯一の室にて、應接所ともなり、勉强室ともなり、寢室ともなるものなりき、此の室の外彼が有するは餘り廣からざる試驗室あるのみ。此の室は初めて見たるものには甚だ珍らしきものなりき。壁には人の頭蓋、動物の骸骨など掛けられ、大小の刀劍あり、楯あり、甲胄の類あり、黑銅にて作られたる鎗の穗など左右に連なれり。箱の「引き出し」の引き出されて室内に置き亂されたるを見れば、其の中には割れ缺けたる燧石、石の鏃、磨き上げられたる黑石の斧、鐵の鏝あり、土器の破れたる片々雜はれり、或るものは未だ燒かれず、或るものは半ば燒かれ、或るものは羅馬人の發明せしものゝ如く完全に磨き上げられたり。骨より作りたる粗製の針の傍らには青銅製のナイフあり、其の柄には幾何の意匠を凝したりと見ゆる紋樣を刻みたり。科學者の机の上には馴鹿の角あり、この角は彼が最も珍重するものゝ一にて、其の上に馴鹿の像の幼なく刻まれたるあり。

彼は此頃六週日の休暇を得、昔の昔住み居たる人類の狀態を探撿せんと思ひ立ち、六週日を歐洲諸國の古洞に費し、多くの材料を得て歸り來れる也。彼はドルドーンの名高き洞を見ん爲めに佛蘭西の南方に行き、或は白耳義に行てエンギス、エンギホールなぞの古窟を探り、或は深くハルツ山に入り、或は匈牙利まで其の

歩を運ひ、英國に渡りてはヨークサイヤ、ウエルス、デボンサイア諸地方にある洞をも實見したりき。彼が其の學校に歸りたるときは、彼の腦は事實を以て滿たされたり。拾ひ集めたる事實の多き、彼は如何にして此等の事實に順序を立て丶排列し、彼の生徒が最も聞かんことを望みたる、歴史以前の歐洲人の生活に關する驚くべき話を平易明白に語らんかと苦心しつ丶ありき。此の日は暑き日なりき、南方より來れる風は科學者の身邊を吹て、其の心を倦ましめ、其の身を睡に誘へり。彼は現の境に入りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今までありし室は消へ失せたり、今まで見へし村は見へずなりぬ、茅舍、穀田、牛馬の群總て消へ失せたり。彼は其の國が彼方の端より此方の端まで、目の力の及ぶ限り、暗く茂りたる森と、未開の荒地にて蔽はる丶を見たり。北の方の山よりは氷河押し來り、柏、松、樺のいやが上に茂りたる谷を流れ下るあり、野馬、大鹿は草茫々たる平野を驅け廻りつ丶あるを見たり。彼が住ひ居る國は島國なるに何方を見るも海はなく、陸は一面に大陸と連なり、大陸にあらざれば見るを得ざる動物群をなして移住し來るあり。此等の動物は皆今まで此の國にて見るを得ざりしものなりき。河には河馬の泳けるあり、其の岸よりは犀、象の飲むあり、大なる海狸は河を横切つて堤を築き、森には狼あり、熊あり、狐あり、人は皆彼處にある穴、此處にある洞の中に住めり。

最も科學者の注意を惹き起せしは此等の人種なりき。彼れは此等の人か如何なる生活をなすかを知らんとの好奇心を制する能はずして、洞の方へと歩を運ばせたり。洞の口に裸躰小兒の一群あり、石片を弄そび、兩兩相打ちて、其の父が用ゆるごとき石器に似たるものを作らんとするに似たり。小兒の群を去ること遠から

ず、腰に野獣の皮を纒ひたる一人の婦人は薪を集めつゝあり、他の婦人は木の根を掘りつゝあり、一人は少しく森の方へ進み、木の洞にある蜂蜜を探りつゝありき。

暮色沈々として一陣の風吹き起り、風の過ぎしとき奔雷に似たる聲起ると聞く間に一隻の猛虎、巨口を開き鹿を追ふて森の中より跳り出で、婦人小兒は皆な足を奪つて洞の中へ逃け入りたり。鹿は其の大なる角を振つて敵と鬪ひしが、力早く盡きて虎の鋭き齒は既に其の喉に達し、一聲高く叫んで地に倒れたり。此の時咄喊の聲森の中より響き來り、不思議なる男の姿見ゆと思ふ間に、一方の肩より毛の皮を掛け、腰に帶を着け、石を削り尖らせ、革にて柄に結びたる奇怪なる武器を手にし、長髪を風に靡かしたる一群の男引き續きて現はれたり、彼等は一齊に喊を作り、虎を目掛けて跳り掛り、雨の降る如く四方より之を亂打せり。鋭き爪牙の虎と鈍き武器の男等との間に必死の劇鬪あると暫時にして虎は遂に其の斃せし餌の傍らに斃れぬ。獵夫等は虎の皮を剝ぎ齒を取りて其の獲物とし虎が殺したる鹿の肉は切り碎なめられて



彼等の餌となりぬ。

科學者は獵夫等が石斧を以て肉を碎くことの巧みなるに驚けり。割かれたる肉は銘々肩の上に載せ、山を踰

へて洞に持ち歸られ、洞の口には婦人、小兒出で丶聲を放つて彼等を歡迎せり。

次で饗宴始まりぬ。火を燧るは最も困難なる業の一つにて、軟かき木の板に渠を穿り、此に鋭く削りたる棒を入れて、あらん限りの速さを以て軋らしめ、磨擦熱を起して渠に溜りたる木屑を燃さしむ。火を燧り出すの困難既に除かるれば、洞の口にて盛んに篝を燒き、一方には猛獸の襲ひ來るを拒き、一方にて食を調理す。彼等が如何なる方によつて調理せしか、科學者は見るを得ざりしも、必定、骨より切り離されたる肉、直ちに燼灰の中に放げ入れしならんと鑑定せり。科學者は更に心を留めて彼等のなす所ろを見守りしに、彼等は生なる骨を截ち割りて其の中にある髓液を吸へり、此に過ぎたる美味なしと云へるが如き樣にて。

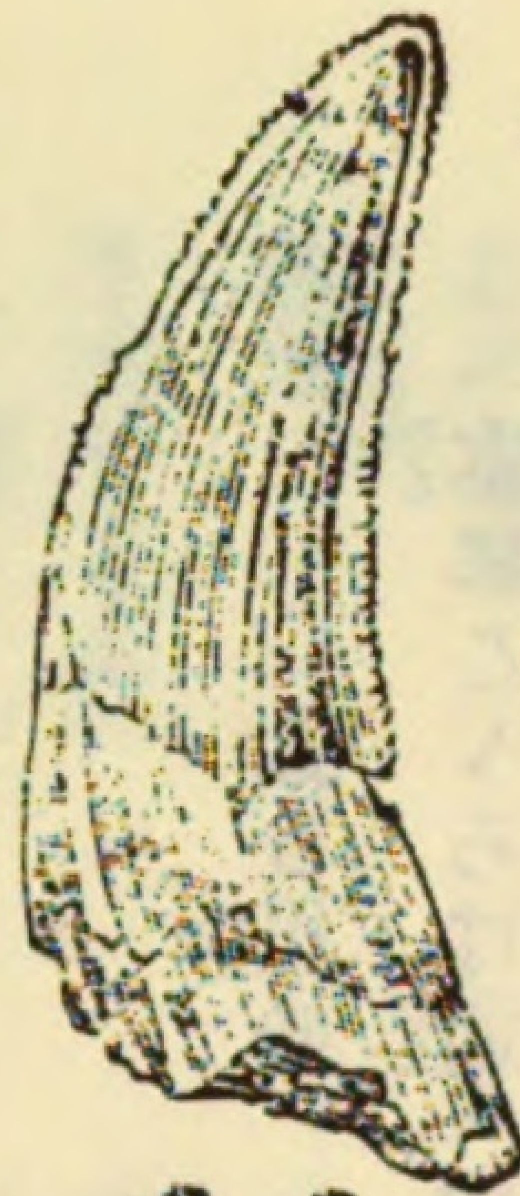
饗宴止んで、狼藉たる骨骸は、分捕物なる虎の牙と共に洞の中に投げ入れられたり、此を見たる科學者は、其の旅行中或る洞にて得たる鹿の骨と虎の牙とのことを思ひ出しぬ。

人は皆な眠りに就き、夜は更けたり。奇怪なる叫聲森の中より響きぬ。獅子の吼ゆる聲に雜れる狼の叫び聲、笑ふが如き山猫の聲によりて察するに、此等の野獸皆な虎の屍の香を嗅ぎて集まり來りたるなるべし。されど此等の猛獰なる一群も、盛んに燃ゆる篝に恐れをなして近づき得ず、眠れる人、斃れたる虎を空しく前に見たるのみにて朝日の出づると共に再たび林中に沒し去りぬ。日出て丶總てのもの忙がはしげに立ち働けり。

昨日の鬪にて彼等の武器は皆な折れ毀たれたるもの故、彼等は、今日の食を獵らん爲めに武器を新調せざるべからず。或るものは洞の外の地上に坐し、石を取つて其の膝の間に置き、他の一塊を手に持つて槌とし膝の間にあるものを打ち、之を割き、一端を尖らし一

方を削り刀を作れり。其の意に適するものを得るまでは、作り易へ、また作り易へられたること幾度なるかを知らず、洞の口は石片の堆をなす計りになりぬ。他のものは石斧を揮つて樹の枝を斬り、柄を作り、他のものは鹿の肉の殘れるものより筋を求め、之を糸となし、骨の針にて虎の皮を縫ひて一領の衣服となしぬ。『此なり、此なり』科學者は獨語しぬ、『これ太古の人の夏時に於ける生活なり、さらば冬の日の來りたるとき彼等は如何に其の生を保つべき乎』。語未だ了らずして天地の光景既に一新しぬ。氷河は流れて遙か低き谷にまで達し、山とも云はず、小山とも云はず、平地とも云はず、一面に雪に埋もれ、地は凸凹なく一望皚々たる平野となれり。河馬、象、獅子の群は遠く南方の暖國に逃げ去りてあらず。馴鹿、野牛の群北方より來つて其の後を充たし、雪の野を彷徨へり。柴比利亞の砂原に其の骨を留めて滅し去りたるマンモスと名くる有毛の大象、同じく有毛の犀も來り、小高き地には有角の羊（此の種も昔滅し去りぬ）の彼方、此方に散れるあり。寒きこと云はん計りなけれど、彼の獵夫等は尙ほ時々野獸の皮を着て洞の中より出で來り、マムモス、馴鹿、野牛を捕へて其の食に宛て、洞内の火を保たん爲めに樹を斬るもあり、枝を拾ふもありき。


石器


虎齒


石針

（つゞく）

文藝

故郷を懷ふ

湖處子

ふる里の
空をはるゞゝ立ち出でゝ、

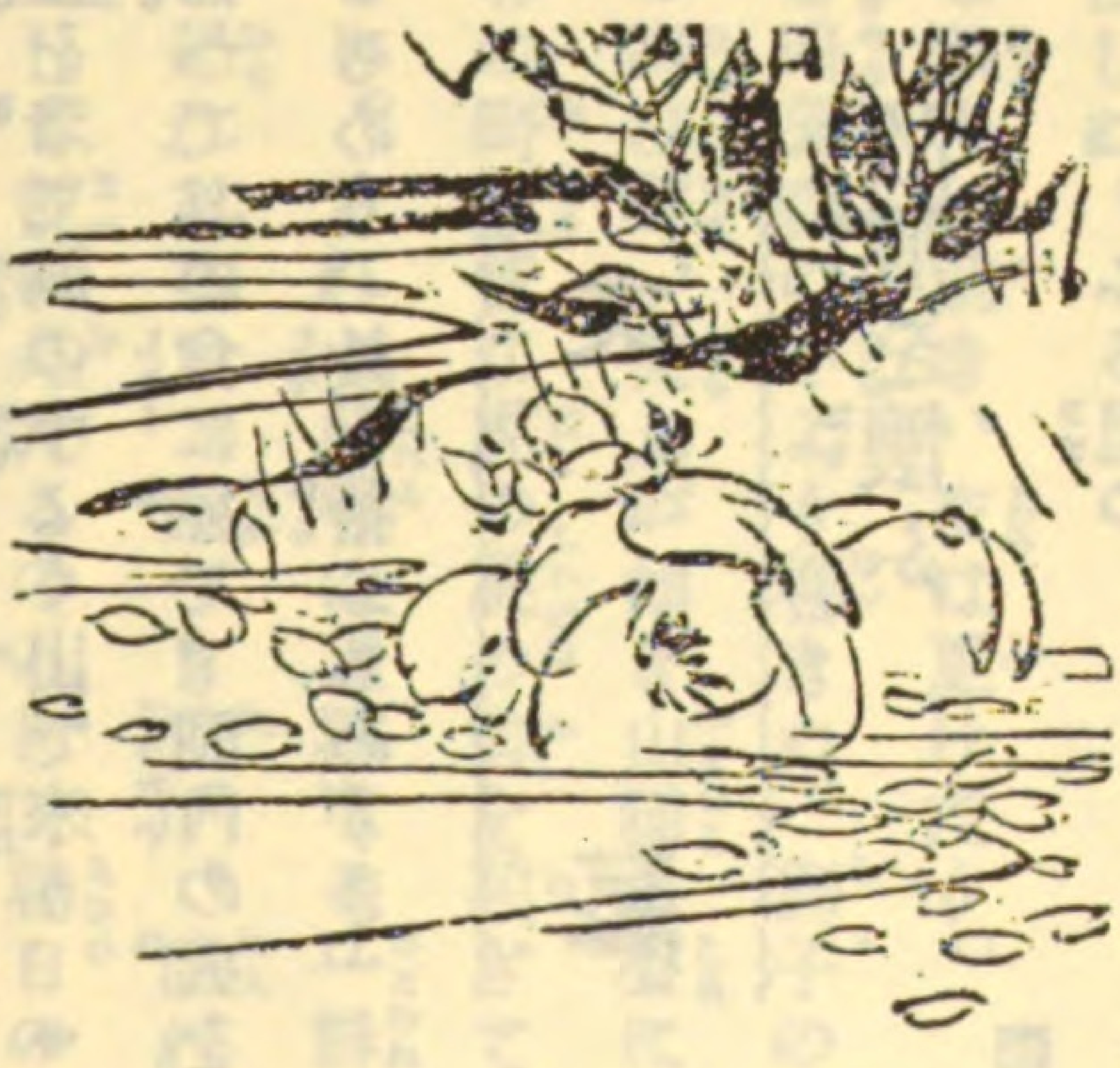
日かす數多になりぬれば。
けふは歸らむ明日はもと、
思はぬ日こそなかりけれ。

ふる里の
空にこゝろは通へども、
旅路はるゞゝたどり來て。
鳥ならぬ身は徒らに、
翼のなきをなげくなり。

あくがれて
あなたの空をながむれば、
昨日も今日もふる里に。
天つかりがね歸るなり、
あなうらやまし天つかりかね。

春の庭

家永ねい子



白金も　こがねも玉も
およびなき　春のたからは
花ならで　何をかも見ん
花なくば　何樂まん
庭の面に　くさゞゝ咲ける
花のなかに　今を盛りと
さきみてる　乙女椿よ

その名をも　見する姿よ
その色の　いともゆかしく
そのにほひ　いと妙なれば
わが友の　その文机に
ひと枝を　折りてやさゝん
およびなき　花のかざしと
一枝は　をりてかざゝん
朝夕に　めづる椿を
手折るさへ　いとをしけれど
たをらずて　ちらすもはかな
この花は　八千代の春の
玉椿　それかあらぬか
またもこん　春には咲けど
ふる雨に　色やあせなん
吹く風に　ちらされもせん
かく惜しき　椿のもとに

いとひきゝ　一木のはちす
紫の　そのうす色も
いと高き　けはひの見えて
清らなる　この花はしも
手折るべき　花とも見えず
かざすべき　花ならねども
わが庭の　花てふ花の
そが中に　ちりのうき世の
ちりをしも　高く離れし
人にこそ　比へてや見ん
この花に　近く生ひたる
常盤木の　松の緑に
うちまじる　血しほのかへで
うるはしき　その色はしも
雨風を　いとふならねば
見る人の　心ぞやすき

げにこれぞ　青地のにしき
うちはへし　かへでのいろよ
一入の　色もそへけり
昨日今日　降る春雨に
杉たてる　垣ほに近き
幾もとの　一重のさくら
いつしかも　咲きそめにけり
すみ初めし　庭の櫻よ
嬉しくも　盛りと咲きぬ
たかどのゝ　窓より見れば
春風に　散るさまはしも
時ならぬ　雪とぞ見べき
木のもとに　をりたち見れば
打つゞく　花の梢は
白雲の　中とや見べき
咲きしより　はやちりそむる
さくら花　掃ふも惜しき
こゝちして　いでこの本に
一夜われ　明さまほしき
心地さへ　せらるゝばかり
朝な夕な　花の筵の
そが上を　漫歩けば
散りかゝる　花は袖にも
行く春の　かたみ殘して
いつまでも　とゞめまほしな
殘りなく　散るぞめでたき
武士の　心の花も
かくぞとは　いひはやせども
さくら花　ちりかふ見れば
げにもわれ　しづ心なし
いざ櫻　また來ん春は
うつくしき　この色や見ん

さくら咲く　この下蔭は
寒からで　ちる白雪の
ふりかゝる　木かげの木々に
花さかぬ　花もさかせつ
おもしろき　色をも見せて
惜しと思ふ　その心さへ
今はわすれつ

嬰兒（つゞき）

一一生

左の書翰は本月一日郷國の母に寄せたるもの、錄し以つて「嬰兒」續稿と爲す

（上略）初孫の顔はやく見たしとて毎度歸郷を催促遊ばされ私事も既に八ヶ年も慈顔を拜し不申候に付きぜひ〳〵今年中に一度歸郷致すべき積りに御座候へ共今一二ヶ月中には歸る都合に參り兼ね誠に不本意の至りに奉存候依て小兒の近況を一寸申上候先達而私事流行感冒の節彼れにも傳染致し一週間ばかり惱み候ゆゑにて肺炎と申す病氣に相成高橋と申す女醫（小兒科に長ずと聞き候ゆゑ）の診察にて胸より腹へかけ一帶に綿をもてつゝみ其上をフランネルにてぐる〳〵卷くを好しと申し始め四五日は毎日卷き換へ後には隔日に卷き換へ申し外に毎日三四回づゝ服藥致させ申候處十日ばかりにて全快致候全快後は例の肥滿なる顔も私事の顔のやうに細り始めて見る人より此兒は父に肖て居る抔と言はれ候へ共四五日にして以前の通り肥滿の顔と相成申候足の瘦せたるは今日も尙は以前の如くに太り不申候へ共小兒歩行を始むれば足瘦せると申す事に候ゆゑ少しも心配無之候コロ〳〵太りたる足が瘦せて歩行に都合よく相成候次第にも候はんか此頃は近所の太神宮社内へ守り女に手を引かれて行き候が往復四丁ばかり歩行致す外に毎日午前に二時間、午後にも二時間太神宮社内を歩みづめにて少しも休まずとの事に候

へば少くも一時間に六七丁は歩み申すべく一日間に歩む道程は一里以上かと相考へ申候家の中にても歩み候ゆゑ一里半位になるかも知れ不申候

斯く運動のはげしく相成候に付ては飲食の高も俄に相増し乳を呑むの勢は以前に倍し其間には薩摩薯塩せんべい食麵包等を食べつゞけ申居候食麵包は此頃より食はせ試み候ものにて旨きものには無御座候へ共彼は好んでこれを食べ母が不在にて泣き居る時にても食麵包を與へ候へば直に泣き止み申候

私事住居の屋敷總躰の大門有之此門の入り口に駄菓子屋有之候門を出入致すにはぜひとも此駄菓子屋の前を通る事に御座候が彼は通る毎に駄菓子をねだり申候買ふて與へ候へば其邊に犬の居るのを見て彼は直に菓子を投與致し犬がカリ／＼食ひ候間は不思議そうに眺め居り其の食ひ終りて口なめづり致す時に相成彼は犬に向つて菓子を返して呉れとの意味にてオクエ／＼と言ひながら手を出し候オクエとはお呉れの意味に有之彼は食物其他の物を乞ふ時いつもオクエ／＼と申して手を出す事に御座候

同じ屋敷内にて太田某と申す人の子が豚兒に二ヶ月後れて生れ名前が同じにて字まで異らずと申す事はかねて申上げ置候が其同名のみどり子はジフテリアと申す病氣にて最初のうち親たちが氣付かざりしと藪醫にかけて療治致候より憐れにも三月二十五日に無邪氣なる玉の緒を繫ぎそんじ申候誠に氣之毒の次第に御座候それゆゑ私方一同醫者より小兒諸病の起り始めの樣子に付きいろ／＼聞き出し斯樣のせきをするは何病の下地にあらざるか斯樣の嚔をするは何病の下地にあらざるかと一々心配致居候併し同名のみどり子が死したりとて豚兒が死ぬる譯にも無之候へば決して／＼御心配被下間敷私方にては注意に注意を加へ少しにても不加減の節は直に上手の醫者に相見せ可申決して藪醫には見

世申間敷候今年中には必ず一度歸郷致し天國の光の映ぜる罪なき初孫を膝下に侍べらせ奉り李のやうなる頬へキッスを願ふべき所存に御座候再拜



太田道灌

『我いほは松原つゞき
海ちかく富士の高嶺を
のきばにぞ見る』てふ景勝を占め、武藏の野に千代田の城の千代萬代も榮ゆべき地を拓きて、靜勝と名けぬる館を營み、杜子美が『窓含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船』の句の心をとりて西なるを含雪東なるを泊船といひしは、太田道灌なり。

道灌は風雅心もありて、優しき武士なりしが、去り迚柔弱なるものにはあらずして、意雄に膽大、天晴れ智勇の名將なりき。

彼は後花園帝の文安二年を以て生れ、後土御門帝の文明十八年を以て死し、其間の四十二年は、正に東山義政將軍の世にして、應仁大亂の日に當りぬ。去れば彼れは戰國のならひとして弓矢の敎育をのみ受けたりしが、多少學びの道にも心を寄せ、九歲の時學舍に入り、二年にして能く文を屬しけりとなん。

殊に其和歌に志しぬるは、人の能く知れる如く、金澤山の狩のかへるさに六浦にて驟雨に會ひ、賤が屋に入りて蓑をからんといひければ、優しき乙女の物をばいはで山吹の花一枝折りて出しぬるを、彼は花を求むるにあらずと打腹立ちて歸り、侍臣に斯くと語りければ、年老ぬる士のいふやう、『それは蓑のなきよし斷りかねてなり、古歌(兼明親王の詠)に

七重八重花は咲けども山吹の
みのひとつだになきぞかなしき。

といへる心なるべし』と。之を聽て深く慙嘆しつる彼は、終に和歌に心をひそめて其奥に達するに至りしなり。

曾て下總の廳南に軍を出しける時、山ぎはの海邊を通るに、山の上より弩をや射かけらん、又潮や滿ちぬらんと人々危みしに、折しも夜半の事なり、彼は『いざ我が見來らん』と馬を騎出し、やがて歸りて『潮は干たり』と言ふ。『如何にして知りたりや』と問へば、斯く答へき『

　遠くなりちかくなるみの濱千鳥
　　啼く音にしほのみちひをぞ知る。

といへる古歌によりて。』

一夜兵を率て利根川を渡しけるに、暗さは暗し、淺瀬をば知らず、彼は叫びき『波音あらき處を渡せ』と。蓋し

　そこひなき淵やはさはぐ山川の
　　淺き瀬にこそあだ波はたて。

の意なり。

又彼が京師に上りし時、後土御門帝詔して『武藏野は』と問はせ給ひけるに、彼は直に

　露はかゝぬ方もありけり夕立の
　　そらより廣き武藏野の原。

と答へ、『隅田川の都鳥は』とあるに

　年ふれどわがまだ知らぬ都鳥
　　すみだ川原にやどはあれども。

と言ひき。『我いほは』の詠は此時『なべての景色は』と問はれしに、答へしもの。

此時の事なり、彼は將軍義政の饗應に招かれしが、義政一匹の猿を養ひ置き、見知らざる人を見れば掻き傷はしめて興じけるに、彼はまづ猿つかひに賂ひして之を旅亭にかり來り、出仕の裝束して其傍に至り、飛びかゝらんせしを鞭もていたく打ち伏せぬ。斯くて其日の饗應に赴きしに、將軍は竊に侍臣をして猿を飛びかゝらしむべく用意せしめ置きけるが、猿は彼を見るに及びて恐れて平伏しける。人々見て皆『道灌は唯人ならず』と驚きしといふ。

彼は曾て年十五の頃に、父資清之を戒めて『我れ熟々思ひ見るに、昔より御身の如き性質にて、御身の如き容貌をそなへ、而して禍を免れしものは鮮し。よくよ

く言行を謹まずば後必ず危き事あるべし』と告げ因て『板塀も直くてこそは立て、曲らばやがて倒れぬべし』といひけるを、彼は一雙の屏風を持來り『これ曲れば立ち、直ければ倒るゝは如何に』と答へぬ。

彼が才氣は世に並びなかりしが、子を知るは竟に父に如かざりき。

而して彼自らも亦細川勝元が示しぬる韓昌黎の『短慮不レ成レ功』の句を詠みて、

いそがずは濡れざらましを旅人の　あとよりはるゝ野路の村雨。

といひしが、彼は終に讒により文明十八年七月其主上杉定正の爲に糟屋の第に殺されぬ。上杉管領は終に自ら萬里の長城を壞りしなり。

二日旅行（承前）

行行生

雪の下は鎌倉の都の中心地にして嚴そかにも又賑はしかりける所なりしに、今は旅寢の夢を破るべき人聲もなく、山鳥長閑かに啼て夜は森の間より曙け渡りぬ。」顏を洗ひつゝ坐に歸れば田舍娘來りて朝飯をすゝむる程に、我等は名所巡りの順序など問ひ、案内者を招かしめて出で立つ。

横さまに杉の森蔭を過ぎて鶴が岡八幡宮の階下に出づ。宮は今を距ること八百三十年前後冷泉帝の康平六年に源賴義が奥州征戰の歸途山城國石淸水の神靈を由井の鄕に勸請せしものにて、永保元年二月其子義家之を修理し、治承四年源賴朝兵を擧ぐるに當り常盤の色の松が岡を拓きて之を今の地に遷しゝなり。閣宇壯嚴見るに足るものあり。

階を上る半ばならざるに案内者は先づ階下の大銀杏樹を指しぬ。銀杏樹大さ幾圍、枝茂り葉掩へり。樹は承久元年の昔右大臣實朝が拜賀の夕に公曉禪師を隱くせしものなり。當時

出でいなば主なき宿となりぬとも、　軒端の梅よ春をわするな。

と詠みにし其軒端の春さへ、今は迹もなきを、此の銀

杏樹のみ殘れるぞ痛はし。

我等はそれより樓門社殿を觀、又展列せる古物等をも觀しが、史料として面白きもの少なからざれども、今一々之を記すの煩はしきを避くべし。

社の右に後ろの方を行けば鶴が岡別當十二院の跡あり、大御坊谷を入りて公曉の舊趾もあり。

境内に若宮、白旗神社、泉池、園林などあり。白旗神社は賴朝を祀ると云ふ。

又靜の舞殿あり。彼女が芳野山峯の白雪踏みわけて入りにし人の跡を戀ひ、

しづやしづ賤のをだまきくりかへし
　昔を今になすよしもがな。

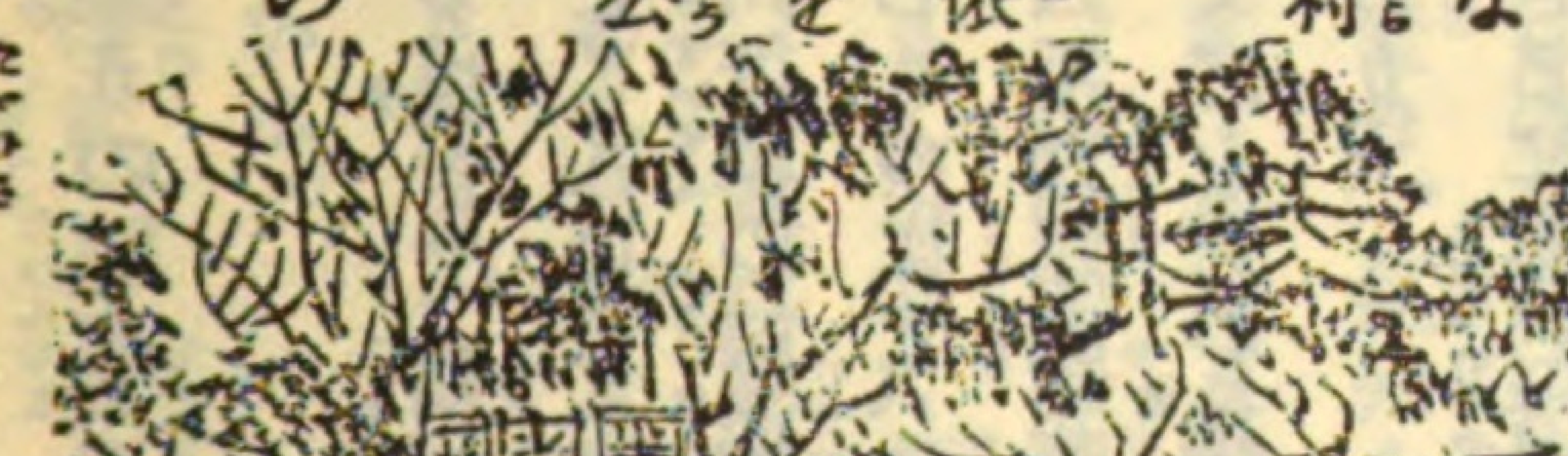
と悲歌しつるは、此の殿なり。粉白褪し盡きて今は唯夢魂栩々たる胡蝶の昔を尋ねつゝ獨り椽側を飛び繞るあるのみ。

階前直に由井が濱邊に向ふ大路は、若宮廣路。鐵の井あり、和田義盛の墓あり、右に岐るゝ路を去りて千度小路に入丸姫の塚あり。

社の左隣は島津忠久の邸趾畠山重忠の邸趾並べり。二邸趾の間を東北に去て、麥圃八町四方は武家政府の開祖源賴朝の屋形迹なり。ア丶彼が覇圖も悵として已みぬ。

歷史に於て久しく人に記憶せられし法華堂、三浦の一族二百七十餘人が自殺したる跡はこれなるべし。又三浦義村が墓あり。

賴朝の墓は、山に依りて一座の小石標を葛蔓覆へり。大頭公眠り寒き七百年、彼が五十三年の夢の跡には春草在り。



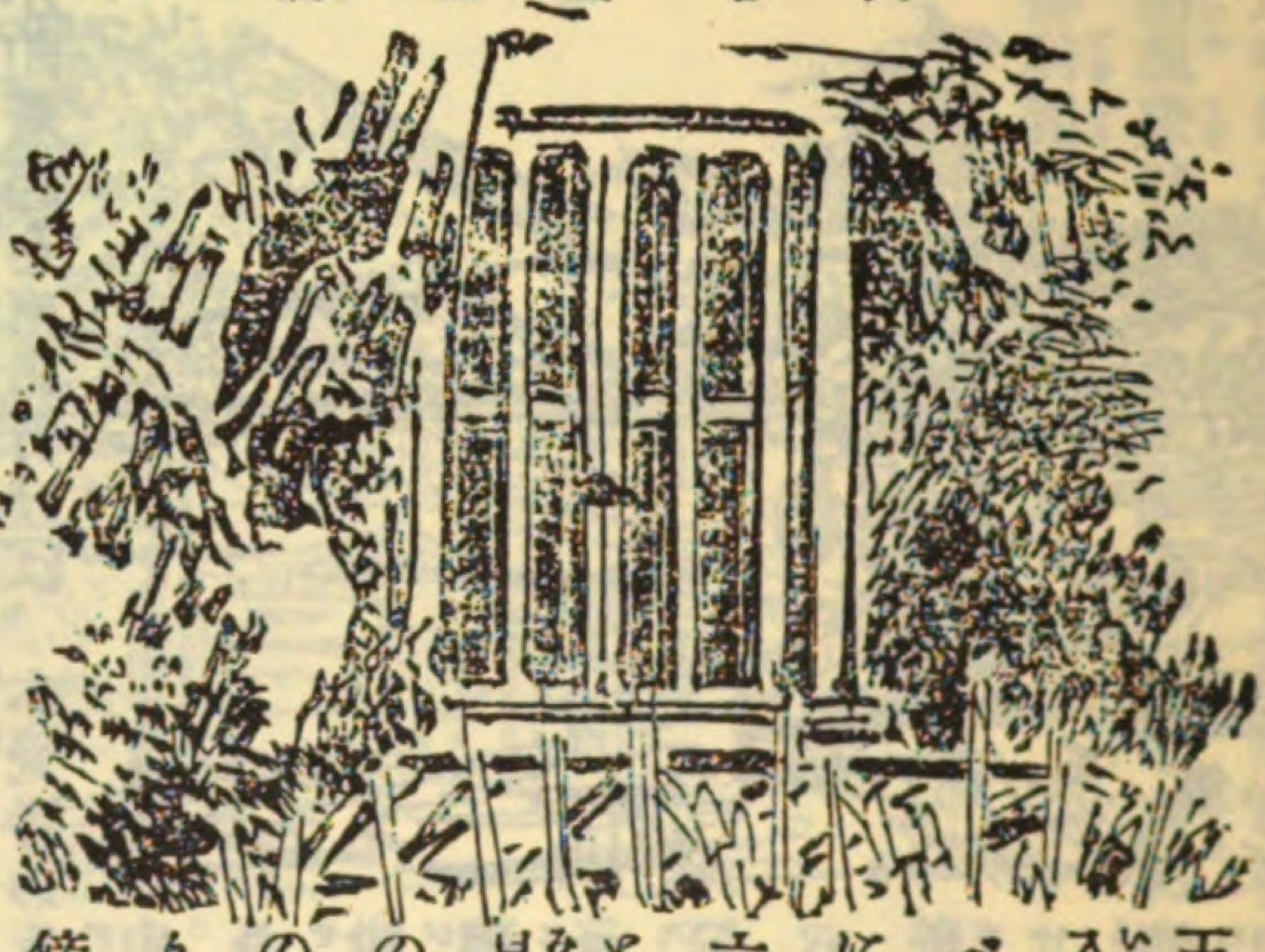
賴朝墓

其傍に大江廣元島津忠久の墓あり、墓は鎌倉に於て多く見る所の小窟墓なり。薩長侯の祖先が此處に相並べ

るも一奇ならずや。

更に東の方荏柄天神を左に見て大都廣路を行けば鎌倉宮あり、大塔宮護良親王を祀る。社後の土窟は則ち親

大塔宮土窟



王の幽せられし所。入口はかゞみて入るべきも、入れば稍右に曲りて下ること五六尺八疊許りに開くと云ふ、暗黑にして見るべからず。其の跡を見るも身の毛のよだつごとくなり。

傍に淵邊義博が碎刄を含めし御首を棄てたる竹林なりと傳ふる處あり。考證家のあるものは言ふ、『淵邊實は親王を伴ふて落ち去れり、彼が弑逆のよし傳へしめしは敵人を欺きしものなり』と。我等は其眞なるや否やを知らず。

案內者言へり『これより更に東に行けば北條一門の墓あり』と。

我等は歩を轉じて還りぬ。

滑川の上流に沿ひて朝比奈切通より金澤へ行く道に足利公方屋敷あり、又梶原屋敷あり、上總介廣常の屋敷あり、青砥藤綱の屋敷といへるもあり、五山第五なる稻荷山淨妙寺もあり。

淨妙寺は淨妙寺村に屬す、足利貞氏の建立にして。退耕和尙を開基とす。足利氏代々の墓あり。

而して所謂公方屋敷は淨妙寺の東なり。足利尊氏の舊宅を、子基氏關東管領として之に居り、滿兼氏滿持氏成氏に傳へぬ。

滑川は聞えしにも似ぬ小川にして、芭蕉の句に

螢火も百がものあり滑川。

といへるもの。

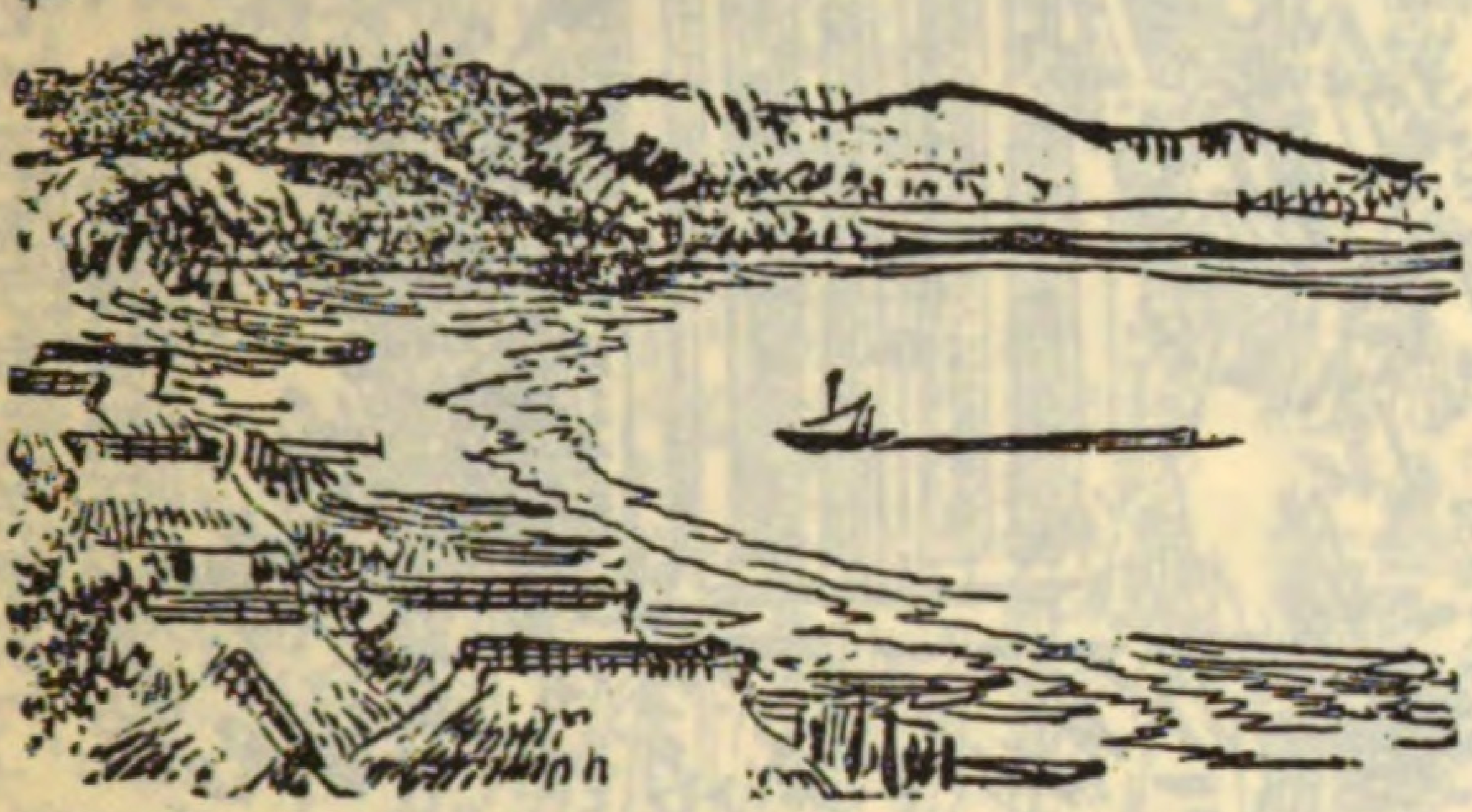
川に近く、文覺屋敷あり、小富士山に對す。

大倉の將軍屋敷は藤原賴經賴嗣等の居りし處。

之に隣れる寶藏院の地は、則ち北條屋敷。其後なる葛西谷は元弘三年五月廿二日高時滅亡の際に北條一門の切腹したる跡。九葉の業遺痕空しきことと亦哀むべし。

小町廣路を南に行けば、本覺寺あり。左に入りて長興山妙本寺あり。妙本寺は僧日蓮が始めて說法せし處、比企大學三郎之を建立す、日朗開祖なり、比企谷に在り、比企能員が居墟なりと云ふ。比企氏の墓あり。其南安養院には足利持氏の墓存せり。我等の下馬棒を渡り並木の間を過ぎ行きけるに、道の傍に畠山重保の墓ありき、其傍は重保の宅趾なり。

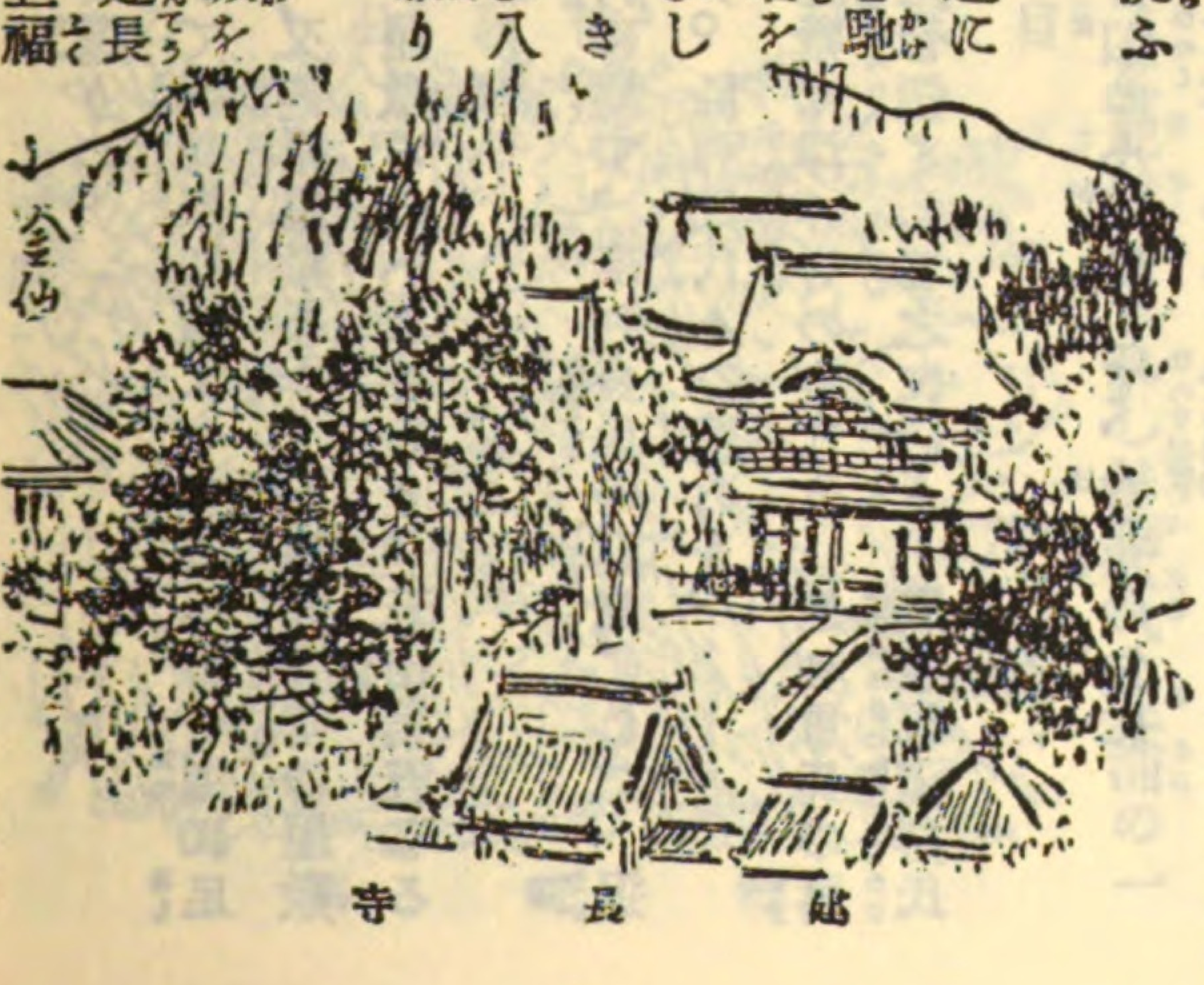
由井濱



由井が濱は鎌倉一帶の海岸にして、水淺く砂淸く眺望大に好し。潮風に吹き撓められし古松の枝ぶりも面白く、波聲松韻相和して澄み渡る空の心地よさ。海濱院あり、以て塵胸を洗ふべし。

二人は由井が濱邊に出で丶、波打際を馳りまはり、或は石を投じなどして遊びしが、斯くてあるべきにあらねば、再び八幡社傍の旗亭に飯りて晝食しぬ。

夫より元の巨福坂を去て名にし負ふ建長寺を覩き。寺は巨福山と稱す、五山の第一にして、建長三年北條相摸守時賴が建る所なり、宋の僧道隆禪師を開山とす、佛敎を假

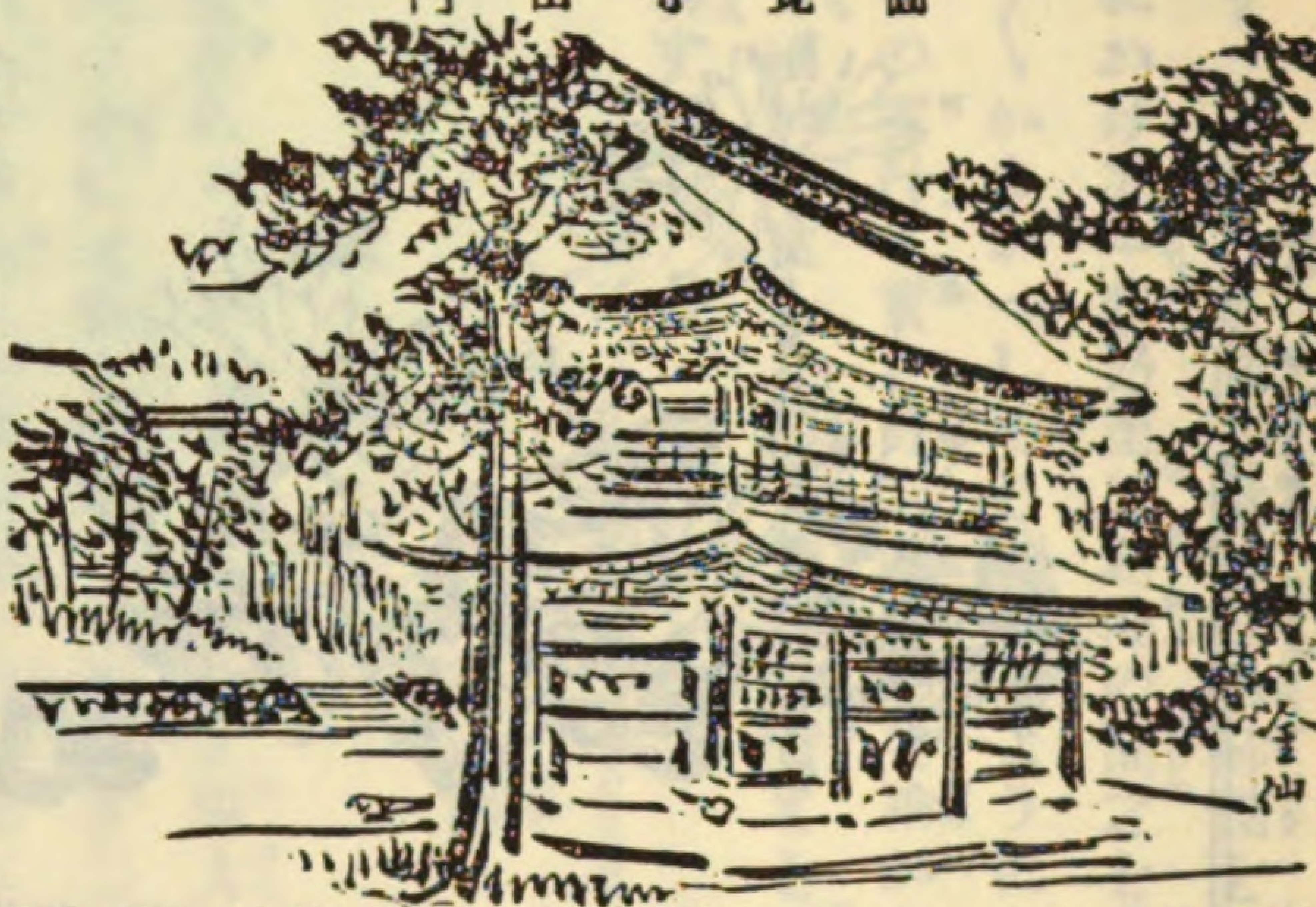


建長寺

て九世の治を致しぬる北條氏の盛時想見るに餘りあり是れ臨濟宗建長派の總本山。

足利尊氏の墓は路の左長壽寺に在り、山之内上杉の管領屋敷は明月院に隣りて路の右に在り。明月院には北條時頼の墓の見えき。

圓覺寺山門



管領屋敷の斜向ひなる淨智寺は五山の第三にして、金峯山と云ふ。宋の僧佛源禪師正念の開山なり。北條師時之を建つ。」

こゝに圖するは圓覺寺の山門なり。弘安五年有名なる北條時宗が、元兵十萬を鏖殺したる翌年を以て建て、宋の僧佛光禪師祖元之を開祖となす。後火に逢ひて燒失せしが足利三世將軍義滿之を再建せり。五山第二の大寺なり。境內見るべきもの少なからず。

之を要するに鎌倉は中世武家政府の首都なりしを以て、一々之を觀去りたらんには、恰も是れ中世史中の旅行なれば、其面白きことも限りなし。去れども我等は今徐ろに之を巡る日子を有せざりしを以て、それより直ちに大船ステーションへと急ぎ、滊車に運ばれて江都に向ひき。品川浦上を見んと欲して窓を開きし頃は已に夜暗ふして唯波の聲を聞きぬ。(完)

家政

調理小話

新奇なる食物

菓子を食ふたる後若しくは食膳に上すべき新奇なる食物あり、たんぽゝの莖是也。



此頃よりたんぽゝは時を得顔に田の畔に咲き齊ふべし。此花の莖を取りて一旦湯にてうでゝ後引上げて水をきりて乾し、（生ま乾きにてよし）之を味噌若しくは糟に漬けて食ふなり、其味極めて美なり。

廢物利用

廢物利用の一とも云ふべきはジヤボンの皮を食ふことなり、是は從來、廢物としてすてられたるものなれども、之を食ふには其皮下にある白き部分をよくむしりてすて、殘りの黄色なる部分を細く切り、一旦うでゝ苦味を去り、醤油と砂糖にて半透明になる迄煮て食ふなり、此すれば苦味と甘味にて云ふべからざる美味あり。

いちご

最早や愛するいちごの時節も近けり。山手の廣き邸宅の邊りを歩行すれば西洋いちごの白き花は今を盛りと咲きそろへり、赤き珊瑚珠の如き實の市場に出るも遠きにあらざるべければ、其食用法を述ぶるも大早計ならざるべし。菓物はすべて人身の血液を清めんがために作られたるものにして、肉食する人は殊に菓物を食はざるべからず、然らずば、血液汚腐して種々なる病氣を來たすべし。殊とに夏時は菓物のために精神を快愉ならしむるの必要あり。

いちごを食ふには先づ之を洗ひて砂を落としざるに入れて水をきり。後、純白なる皿に盛り、牛乳をかけて食ふを以て最も美なりとす、若し好みによりては少量の砂糖を加ふるも可なり。また牛乳を用ひず砂糖のみ

を用ゆるも可也。實に此時はいちごこそ人の生命を守るの具と思ふほどなり。

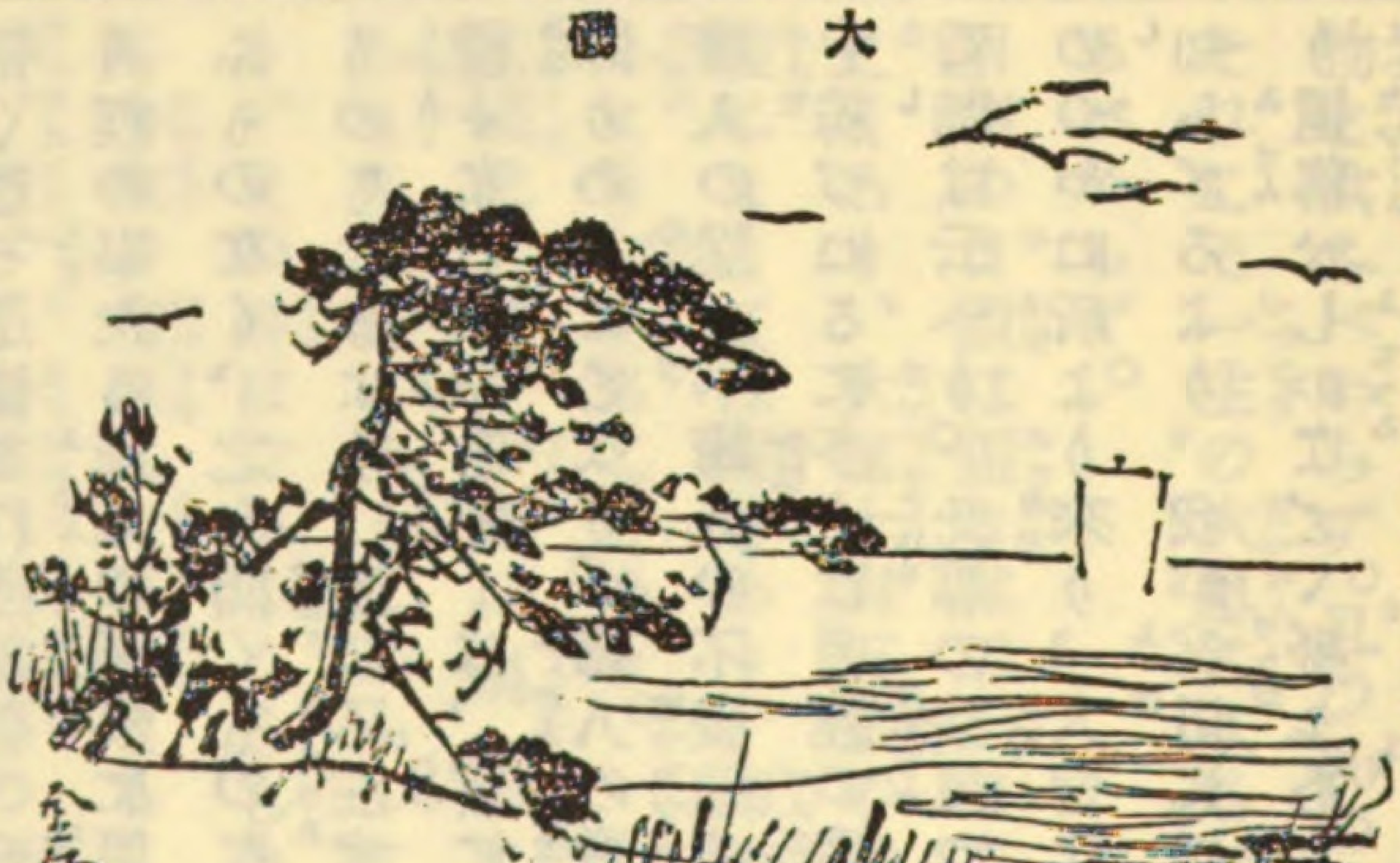
次に若し邸内に多くのいちごありて一時に食ふこと能はずばジャムとして保存すべし、ジャムを作るには先づいちごを洗ふて砂をさり、之をざるに入れて水をきり、いちごと同分量位の白砂糖を加へて鍋に入れ文火にかけて一時乃至二時間の間之を煮るべし、但しよく〳〵かきかへしてこげざるようにすべし、此くて後、その煮汁と實と分ち暗くして冷かなる所におくこと半日ばかりにして後また汁と實とを交ぜ器物に入れて保存すべし。

家庭衛生

海水浴

夏期にロンドンの或る親しき婦人を訪ねたる人あり、家の内には簾をたれ、戸を閉ざして全く人なき様に見へ小さき札を下げ避暑と記したるを見たり。去れば主人は近傍の田舎に避暑したるならんと思ひしに、此は如何に主人は依然として在宅せるを見たり。こは夏期に避暑するは一般貴婦人の習となりたれば在宅するを耻ぢとして此かる拙策を行なひたるにありき。

之と同じく、近年夏期に避暑し、海水に浴することも一般の流行となりしより人々争ふて海濱に行くことなるが、中には健康に有効なりや有害なりや否やすら見分けず、唯だ海水に浴せずんば耻辱と思ふて行くものあり、よく〳〵注意すべきことなり。


大磯

海水浴が身躰に有益なるは人々の身躰の搆造によりて異なれり。身躰强壯なれども過度の勞働によりてつかれたる人か、または消化の悪しき

より貧血を來たしたる人などは、波濤あらき熱海、大磯國府津、小田原、興津等の海水に浴するをよしとす。もしまた神經元來過敏にして身躰の元來微弱なる人には、此等の海水浴は却つて有害にして神經に激動を與ふるに過ぎず、故に入浴せずして單に海上の空氣を呼吸するに止むるか、若しくは舞子、須磨、明石、沙海（岡山）濱寺（堺の濱の隣近）若しくは北に山を負ひ、南に海を受けたる傾斜地にして泥海ならざる波濤靜かなる海邊に時々温浴をなすべし。

くれ〴〵も躰質（元來より）虛弱の人にして荒らき波濤に浴し若しくは熱度高き塩湯に入は有害なりとす。海水浴さへすればよしとて人の笑を招くこと勿れ。

禍福の依る所

婦人百病の基も此にあり、婦人一生の健康も此にあり、一生の禍福の基となるべきものは月經にあるに、我姉妹は多く此事に注意せずして空しく一生の禍を招くこそ遺憾なれ。

月經の事たる婦人の隱事に屬するが故に何人も之を云ふものなく、之を聞くものなく、之を尋ねんに敎ゆるものもなきより、遂に不注意千萬なる取扱を爲して種々なる不幸を招くは、實に婦人の爲めに悲しみても餘りあることとなり。婦人の發狂、婦人の熱病、子宮病、婦人の腦病、婦人の不發達病、其他の婦人病は其原因を尋づぬるに多くは月經の事に不注意なるより來ると醫師は云へり。此等の病氣たるその初め少しも人の氣のつかぬ所より來り、人皆な何の原因より來りしかを知らざるより、我が父母には此かる病氣なきに何くより遺傳せしかなどゝ疑ふあり。その實原因は己の月經に對する不注意にあるを知らざるなり。聞く西洋にては慈愛あり敎育ある母は其子女の十四五歲に達するを待ちてくれ〴〵も月經の生理と其養生法とを說き聞かするを常とすと。我國にては女學校にても生理の事を敎ゆるものありと雖も、此一事に至りては隱秘とし敎へざるものありと云へば此に忍びて此事を說くべし。

或る醫師の曰く、日本の婦人は千人に九百五十人は子宮病ならざるなし、痛みに大小の別こそあれ、已れの知ると知らざるとの別こそあれ、子宮病ならざるは少しと。其原因は月經の生理を知らずして月經中に不注意の働を爲すと、月經の生理を知りつゝも父母兄弟の此の事を知らざるより强ひて不注意の働を爲さしむるとによるなるべし、故に月經の生理を知るは己の健康の爲めのみならず人の健康のためにも必要なりと云ふべし。

婦人の躰中に卵巢なるものありて、婦人の躰中の血液は少しづゝそこに下りて之を養ふの必要あり、是れ婦人身躰の搆造の男子に異なる所以なり。然るに卵巢を養ひたる古き血液は四週間目即ち毎月一回づゝ躰外に逸し去るの必要あり、この血液の出るを名けて月經とは云ふなり。

此月經中は婦人一生の禍福の决する時なれば注意の上にも注意を加へて知らざる間の病氣を養ふの愚を免ることと肝要なり。重きものは决して持つべからず、嚴冬は冷水中に入るべからず。成るべく輕快なる衣服をつけて靜かに寢ぬべし。若し起きて居らざるべからざることあるも、决して過度の勞働を爲すべからず。長き道を步すべからす、且つ此間は其神經過敏となり居れば、之をつゝしむべし、淸潔にすることは必要なれども决して入湯すべからず。生姜、胡椒等の如き刺戟物を食ふべからず。且つ此の間に若し寒冒にかゝらば、それこそ一生の大患となるべければゆめ〳〵注意を怠るべからず。

月經の日數は短きは二三日より長きは一週日にわたることあり、大底十四五歲の時より初まれども土地の寒暖によりては遲速あり、印度の如き暖國にては十歲内外より初まることあり。

我國にては、少婦は舅姑と同居するより、月經にて心もちあしくありながらつとめて過度の勞働を爲すあり、その時はたゞ心ぐるしき位のことにてすめど、實は一生の病氣は此に初まるものにして、他日發狂、腦病、衰、子宮病、熱病等の發することあらば、その遠

き原因は此にありと知るべし。

我が知れる人に急性熱病にかゝりし人あり、その原因は何人も知るものなかりしが、實は月經中に入湯したるより起りしなり、かくて此人は遂に死せり、恐るべきは月經中の不注意なり。人の妻たるものは勿論、父母、舅姑兄弟もよく〳〵注意すべきことなり。

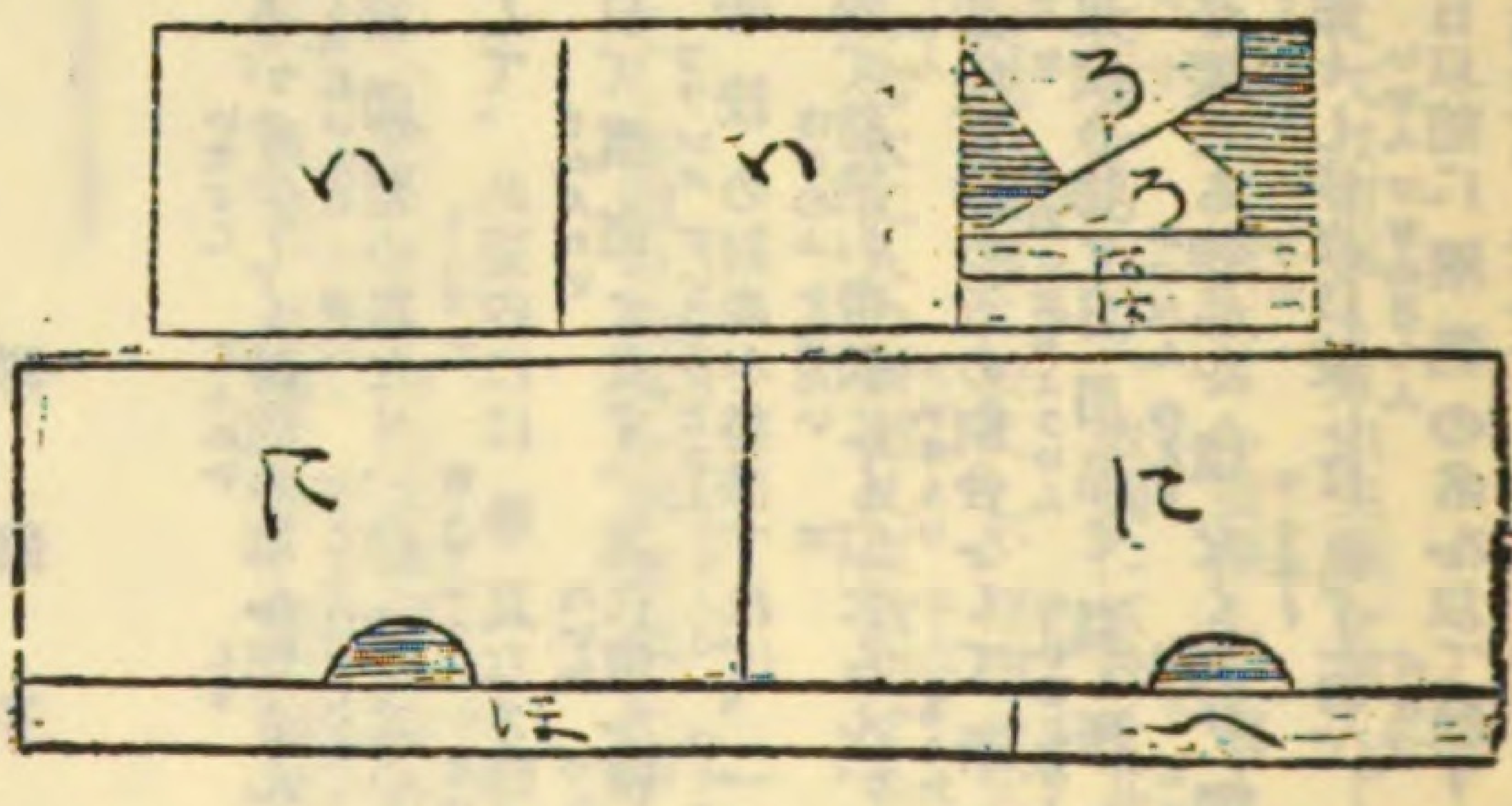
手藝案内

「ミシン」の使用

家庭雜誌第四號に於て「ミシン」と經濟と題して如何に「ミシン」が一家の中に忠義者なるかを説けり、然り洋服を着くる男子又は婦ある家には少くとも一臺の「ミシン」を備えざるべからず、殊に我國に於ては下婢の賃銀歐米諸國に比して非常に廉く、小官吏、小商人、小紳士の家には必らず下婢を置けども彼の國々に於ては中等の生活までは下婢を置かず、洒掃庖厨より家政の事、育兒の事、交際の事に至るまで凡て主婦自ら之を行へば、なか〳〵衣服裁縫の事に手の廻らず、外に出すは金錢上の不經濟なれども時間の「セーヴング」の爲に止むを得ず大抵は裁縫師に委頼す、併し我國にては事情大に彼と異り、一人の下婢を遣ふ家には夫相應に、主婦も下婢も時間の餘裕あり、二人三人遣ふ家には其割にて餘裕の時間あるものなり、故に一人若しくは二人の下婢を雇ふ家には一臺の「ミシン」、三人四人雇ふ家には二臺の「ミシン」を備え置き、夜間にても他の仕事に妨なき時間に、下婢は快く「ミシン」の刻む音に睡氣を覺し、細君は徒然の慰藉に之を扱はゞ、快樂の中 立ろに小兒の「シャツ」位は出來得るなり。

さて如何に「ミシン」を使用すといふに、和服の裁縫とは異なる所も尠からず、「ミシン」の縫方は機械的なれば何人も覺え易く何人も扱ひ易ければ、少し器用なる人は習練を要せずして立派に洋服を縫ひ得る人あり、然しながら大抵我國にて洋服裁縫の習練は五個年を費して大禮服等の縫方に及び然る後裁方を教ゆれども、素人の家内仕事には夫程の上 達に至らずとも、「シャ

ツ」「ヅボン下」或は二三歳までの小兒服（重に金巾にて製す）或は大人の「ヅボン」或は十二三歳までの「ヂヤッケット」を縫ひ得れば夫にて澤山なり、夫より以上の仕立は普通の「ミシン」臺にては間に合はず又商賈人の手に懸けずば躰裁の佳ならざる處あれば、大人の服は裁縫師に委頼する方便利なり、歐米にても大抵男子服は裁縫師に委頼すれど器用なる人は家内にて婦人服を裁縫す、尤も何服にても家内にて出來れば重寶之に過ぎず、隨分縫ひ試みて可なり。家内にて縫ふべき者、裁つべきもの數多あるべけれども玆には「シャツ」の裁方を掲ぐ、前圖は即ち「シャツ」の裁方にて、木綿巾一丈一尺（これは隨分たつぷりの見積なれば長短は人々の嗜好に任す）の羅紗にても「ネル」にても金巾にても一枚の襯衣を製し得べし（い）は袖各一尺一寸五分（ろ）は袖のまち（は）は袖口各一尺三寸（に）は身ごろ各三尺七寸（ほ）は長袵則ち胸の處（へ）は襟、鏝の處は餘の布帛、半圓の處もくり取りたる餘なり、但し後長は二尺、「えりかた」は二寸と知り玉へ、此寸法にて「ミシン」にかくれば丈二尺の大人襯衣を製すべく、且つ「ボタン」の附方は剪刀にて「ボタン」に相當の穴を穿ち其縁をかゞれば六かしき事にあらず、尚ほ「ヅボン」、「ヂャッケット」の簡略なる裁方縫方等は次號に記載すべし、但し「ミシン」は鐵製ゆゑ甚だ錆の着き易きものなれば、一週間に一度宛は油布にて丁寧に掃除し、布帛を被ぶせて戸棚の中に靜に仕舞ひ置くべし。



行きやらで山路くらしつ郭公
今一聲のきかまほしさに

社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

洋蘇子

婚禮

前號には婚禮擧行の期日まで記了したるが今少しく婚禮の事を記さん、

「コルベイユ、ド、マリヤージ」――是は婚禮籃の義なり、婚禮式の前に郞の家より婦の家に贈る結納物にして、此籃内には善良なる時計類若しくは布帛類を藏めて之を贈るを以て慣例となす、其代價を積れば婦の持參金の五分の一、即ち縁女五千法の財産を持參すれば、一千法の贈物を爲さゞるを得す、日本に於て結納の帶代にも似たらんか、」

嫁入道具――これは婦が持參する財産の百分の五の割合をもて新に購求し、郞の家に携ふ、其品々は目出度き物と日用品と臺所用に供するもの別言すれば妻君たるに必要なる物品を遺なく買ひ調ふ、其數々の品々を記述するは餘りに諄々しければ茲には略しぬ、

婚禮式の通知――は婚禮の日より八日以前に兩親の名を以て發するが通例なり、然し知人にして斯の如き式場に列席を請ひ難き人又は來臨を請ふを欲せざる人には婚禮後に同じ日附を以て案内狀を發する習慣あり、斯の如きものこそ眞の虚禮とは申すべけれ、

結婚條約書――昔時は婚禮の當日に祝宴を張る例なりしが、今は然らず、結婚條約書に署名する夕に幸福なる宴を開く、此條約書は婚禮式執行の二三日前、嚴肅なる式を設け公證人、證人、兩親、新夫婦、其親族立會の上、宴終りし後新郞より筆を起し、次に新婦、次に新郞の母、次に新婦の母、次に双方の父署名し了り、結尾に來會者年齡の順によりて署名し終るといふ、

婚禮式――大低寺院に於て之を擧行す、其儀式の模樣に至りては頗る煩雜且つ宗派によりて異同あれば、ワザと記せす、要するに神聖と嚴格とを表するに外ならず、此時寺院に上下する新郞新婦、如何に幸福に、如何に絶快に、新婦は處女たるの姿を脫して、茲に一家の女王たるの粉裝を凝らし、新郞と共に馬車に乘り、徐に寺院の舖石の上を出で行くは、如何に美麗なる巴里市中の觀物なるよ、

婚禮の入費――婚禮の諸雜費は身分に應じ實に莫大なり、故に若き男女は輕々しく婚禮を行はず、之は日本にても同じ事なれども、西洋にては一層甚しきを見る、通例婚禮に依て財産の大半を傾盡す、男子は三十歳頃までは孜々營々として婚禮に充つる財産を貯蓄せざれば、一生孤獨者とならざるを得す、而して婚禮の入費は大概男子に於て辨ずる習慣となり居れば、財産を要するも禮式の一なり、即ち郞より贈る種々の遺物。結納物、新婦の婢僕に與ふる手當金、祝宴費、婚禮當日の馬車代、式場の諸入費、新婦の介副女に贈物、其他の諸雜費、凡て新郞の囊中より出づれば、多の財産も婚禮によりて蕩盡するもの多し、

「ホネー、ムーン」――これは蜜月と譯す、婚禮を擧げたる後一月の間な

り、其出所は詳しく知らされど、新夫婦親和なること蜜の如きを形容したるものならん、蜜月には夫婦連にて近縣に旅行す、此習慣は元と英國より創れり、佛國にても新夫婦は婚禮後一ヶ月間は、親族の家の宴會に招待せらるゝ外は一切外出せず、閉居して新夫婦の位置に馴るゝ爲に要用なる時間なりとす、

亞米利加主義と獨乙主義——亞米利加にては何事も自由主義を重んじ、又婦人の教育も行届ける故に、男女自ら夫たり妻たるを撰擇し、自ら夫妻たるの契約を結び、而して後兩親に告ぐるなり、他國には餘り其類を見ず、之に反して獨乙にては契約を兩親の面前に於てし、指環の交換も亦然かす、英若しくは米の如く許嫁の男女二人の對話又は散歩するの自由を與へず、

一種の婚禮披露——獨乙にても英國にても婚禮の披露を新聞紙に廣告す、要は汎く世に知らするにあり、

婚禮につきては記載すべき件少しとせず、然れども右は其概梗を摘みて筆を擱し、次號よりは葬禮、吊問、誕生、書翰、名刺、贈物、衣服、食事等の諸件を簡明に記述すべし

流行の栞　春夢

夏衣の案内

いざ衣更のしをりせむ、

男帯物——若し價格を厭はず、上等の品質を撰まば、流行は鼠地に淡茶の如き淡色、柄は微塵、萬筋なる市樂、壁絲織、絲織に如くはなし、

若し中年の好にてとならば結城紬又縞物に如くはなし、若し柄の珍らしく面白きを好まば、伊勢崎銘線に如くはなし、本年は近年無類の上出來なり、

男羽織——には黒絽の三紋に如くはなし、さて紋の大さは鯨尺八分より九分まで、若し縞物とならば、一を市樂、二を博多絽三を奥撰織四を紅梅撰絲、柄は紺地に鼠の大名萬筋

女帯物——先づ第一に指を折るは京御召の風通織、次は縞御召、次は市樂、地色は淡鼠、小豆鼠(少し赤味を帯びし)、利久鼠(茶を帯びし色)深川鼠(極めて淡き鼠色の事)の淡色流行の魁をなし、柄は木賊、錬瓦崩(隨分珍らしき名なり)、通し小紋(これは小紋の眞直に通りたる柄)、行儀あられ(これは少し大きな小紋形の角の落ちて行儀よき柄)微塵(人の知る)ぬけ大名(これは大名縞の飛々になりたる柄)最も流行の傾向を有す

次は鶉縮緬、次は前記の伊勢崎銘線、これには女向には殊に珍らしく不思議なる柄を織りなしぬ、

若し價格廉に、品質確に、柄新規に、色美麗に、恰も平民的流行に相當するは、八王子産の紅梅織に如くはなし、紅梅織とはいへど紅味を帯びたる故にあらず、色は鼠にても、茶にても、藍にても、

女羽織——なし

木綿單衣——先づ薩摩飛白にして男子は十の字、女向には種々の珍飛白、次は瓦斯糸結城、これにも頗る珍柄あり、瓦斯二子、其次は結城木綿、松坂縞の數々、これ最も平民的、

浴衣地——浴湯後の肌にさら〳〵と風に打たれて心地よき浴衣の、女向に第一位を占むるは瀧川縮緬、縮緬と言へど縮緬にあらず、一見縮緬に見擬ふばかり、價格は廉に、品質は高尚、次は紺絞、これには有松絞と博多絞と二種あり、されど孰れも淡泊したる形流行の傾向あり、次は男女共には瓦斯糸、眞岡木綿、縮の形附、流行は紺地に白力、其次は例の玉川縮、

帶——帶はアザと記さず、簞笥の中に淡色の繻珍の丸帶、又は瀟洒したる縮緬と繻子、更紗形と小柳の腹合帶を藏むる婦あらば、これからが晴の時候なり

「セル」地と「チル」地——男子には微塵又は竪縞、婦人には小紋形、

倭セル——「セル」に似て「セル」よりも優るものは、白木屋專賣の倭セルなり、「セル」に比し高尚にして優美なるは、毛と瓦斯絲にて織り混ぜたる故ならん、柄と色合は種々様々、昨今の時節柄の進物等には頗る適當、價格は一碼二圓五六十錢、「セル」の半價にも至らず、

價格——昨年に比し縮緬類は一割内外の騰貴他は餘り異動なし、左に其標準、

男物

市樂(自八圓至十一圓)、壁絲織(自八圓至十一圓)、絲織(自五圓至八圓)、結城紬絣(自六圓半至一圓三十錢)、同縞物(自四圓八十錢至六圓)、銘線(自二圓八十錢至四圓五十錢)、黒絽(自四圓至七圓)、博多絽(自五圓半至七圓半)、奥撰織(自五圓半至六圓半)、紅梅撰絲(自二圓八十錢至三圓半)

女物

風通織(自九圓半至十二圓)、上州縞御召(自四圓半至六圓)、京縞御召(自六圓半至八圓)、鶉縮緬(自六圓至七圓半)、紅梅織(自二圓二十錢至三圓二十錢)

男女兩用

薩摩飛白(自二圓至三圓半)、同(自四圓至七圓)、瓦斯結城(自一圓三十錢至二圓半)、瓦斯二子(自八十錢至一圓二十錢)、結城木綿(自八十五錢至一圓)、松坂縞(自八十五錢至六十錢)

浴衣地

瀧川縮緬(自一圓八十錢至二圓)、紺絞(自九十錢至一圓二十錢)同(自一圓八十錢至二圓半)、眞岡木綿(自五十錢至一圓)、縮(自五十錢至一圓)、

セル及チル(自二圓半至三圓半)、

洋服

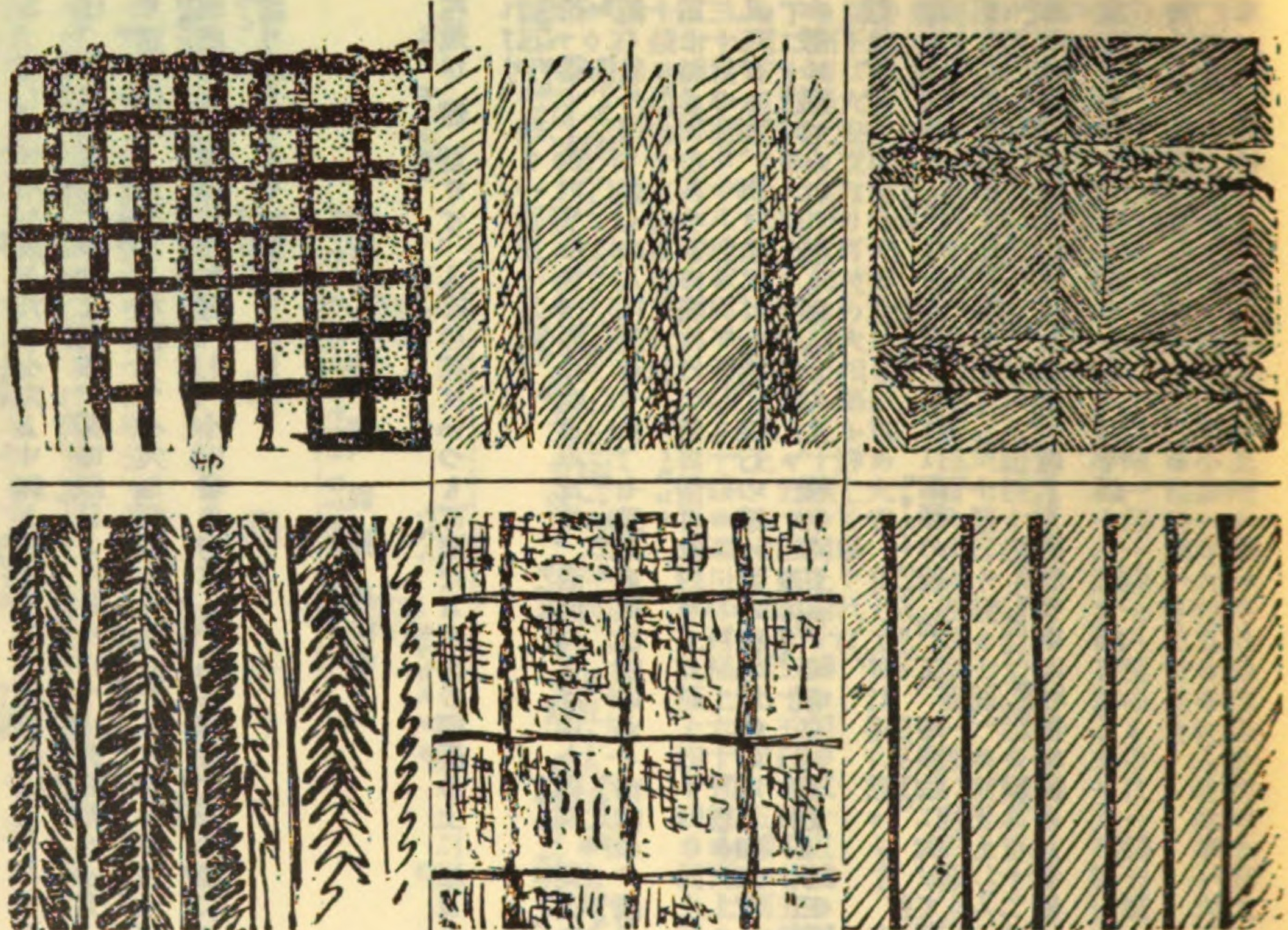
夏向洋服の形も價格も前年と差して變化なし、

脊廣——淡茶淡鼠の搆子(三揃十二三圓)、

「モーニング」——紺、黒の絹セル地又は薄綾羅紗、「ヅボン」は脊廣と同ト色氣の荒き竪縞(絹セルにて上等二十圓中等十六圓下等十二三圓)、

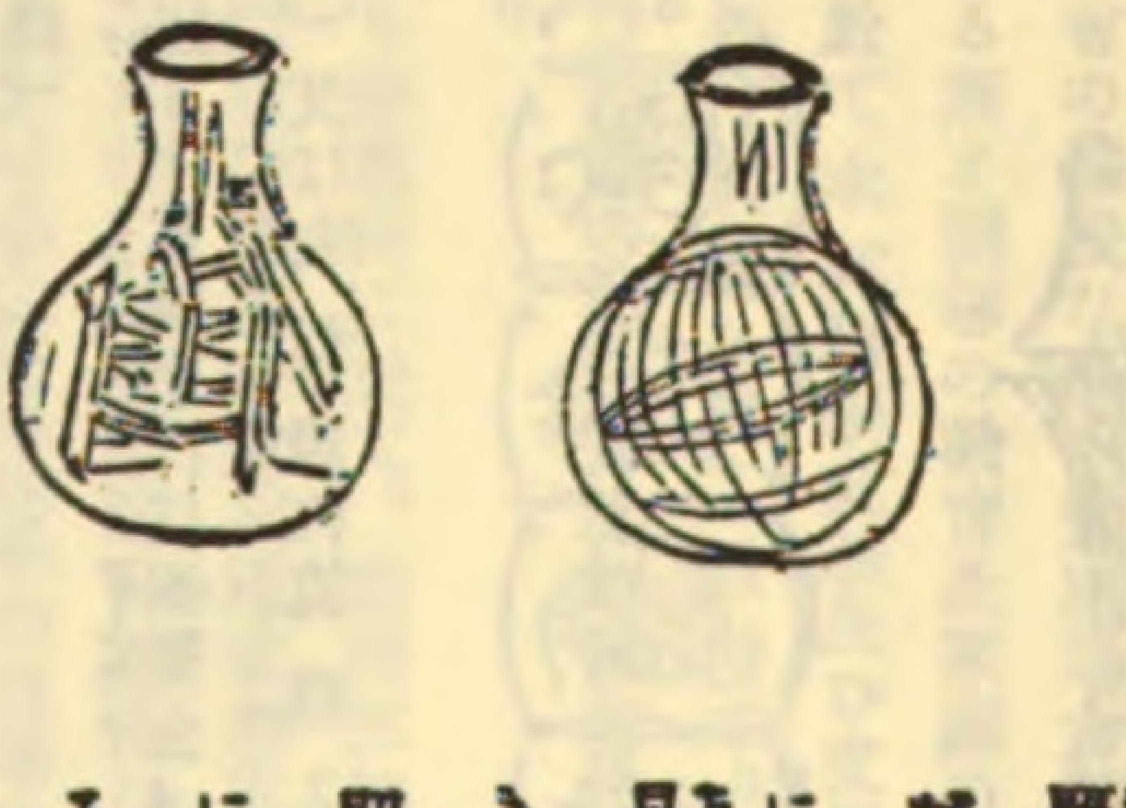
「フロック」——黒絹セル地、薄綾羅紗、「ヅボン」は「モーニング」と同斷(上等二十三圓中等十八圓下等十四圓)、

流行の縞柄は綸様に讓る、



塵除「オーヴァー、コート」──流行色のセル地（自六圓半至八圓半）絹綾(自五圓至八圓)「アルメカ」(自四圓半至六圓半)生リンチン（四圓内外）、

霧避外套──日本服の上に被る、流行柄の絹セル地にて上等十圓普通八圓前後にて賣行甚だ好し、



玩具と置物の一種

若し勸工場の玩具店の前を過ぎなば、細き口の玻璃瓶に藏めたる奇麗なる鞠又は小田卷等を見るならむ、躰裁甚だ佳美にして工夫も甚だ奇なり、これは今日に發明したるにあらねど、少女の上品なる玩具又は机上の置物として用ゐらる、今其の細き口より大なる中身を容るゝ秘訣を傳へむ、即ち鞠を容るゝ方法は、先づ細長き竹片の先に細き麻糸を圓く工合よく卷きつけ、容れらるべき大に造り、其上に極めて薄く綿を延ばし、又其上を木綿絲にて隙間なくかけ廻はし、其上を嗜好の模樣を色絲にて縫取ること鞠を製するが如くすべし、然る後中心なる竹片を靜に拔き取れば、麻絲はさらさらとして竹片に從ひて繰り出され、鞠の内は空洞となる、空洞となりたる鞠殻を揉み縮むれば、細き瓶の口よりは容易く瓶内に納ま

る、而して竹片を抜きたる小穴より細き竹管をもて空氣を吹き入るれば、鋤は忽ち始の大さなる、其時瓶口より竹片にて少許宛綿を小穴より詰め込み、充満するを待ちて小穴を瓶口より長針もてかどり潰せば無疵なる瓶中の佳鋤を得べし、小田巻の方は暇ある人は工夫の上にて造り見らるゝも一興なりかし、

流行の花簪、簪、前挿、根掛等

花飛び蝶舞へど、人事の花はいつも可憐なる少女の頭髪の上に植ゑられけり、

花簪――ゆかりの色は藤の咲きみだれ、岩間にまばゆき躑躅、榮花に飽く牡丹花、多くの人に愛せられ、七重八重花は咲けども山吹の、脆き爲にや、都の人の手に觸れぬこそ口惜けれ、

凡てゴム製、脚は角又は金屬、流行の第一位を占め、他の布帛製はゴムの勢に壓せられて聊も顔色なし、流行の花簪の價は十五錢より三十錢まで、

其外に四時の嫌なき楠玉、これは縮緬の摘細工、時候物に次ぎて行はる、（十五錢より六十錢）、

蔦の摘細工に楠玉を下げしもの、同じく菱形の中に牡丹を嵌めしもの、重に七八歳の少女に愛せらる、（二十錢より三十錢）、

次は「ゴム」製四季の花寄、

束髪用には一輪咲の薔薇、羽二重製の薔薇は相變らず、

簪――象牙細工の細物、細工の緻密なるもの（二十錢より五十錢）、次は角にて之に摸擬したる安物（十錢より三十錢）、

前挿――銀臺メツキ牡丹又は菊の丸彫の新「ダイヤモンド」又は眞珠入（一圓より三圓）、次は素銅の脚に牡丹、蔦、菊の「ゴム」彫（十錢より二十錢）、

根掛――島田用には銀臺金メツキの新「ダイヤモンド」入（四圓五十錢内外）又は丸髷用に眞珠入大流行（三圓五十錢内外）、



島田用



丸髷用

日用品物價（五月十日）

◉白米　前號より二三合方低落、即ち（圓に付）●一等白米一斗一升●二等白米一斗〇二合●三等白米一斗〇四合●四等白米一斗一升六合●五等白米一斗二升三合

◉鹽　大相塲にては餘程變動したれば小賣も從て直安（圓に付き）●赤穗三俵八分●大鹽三俵九分●本齋六俵一分●新齋六俵八分

◉雜穀（圓に付き）●本實大麥三斗一升●臨塲大麥三斗二升●裸麥二斗〇五合●相州小麥一

斗六升五合●船橋小麥一斗九升●上州小麥一斗七升三合●常州小麥二斗〇五合●下總小麥二斗一升●千葉小麥一斗九升五合●札入竹林麥一六五並一八〇●上割麥一七五並二〇五●佐野粟一斗三升五合

◎玉子　玉子は近來大下落にて從來一個一錢七八厘のものは一錢三厘一錢四五厘のものは一錢、一錢のものは七八厘まで下落したり大相場は左の如し(百個に付き)

●本〆十四匁(十圓四十錢、十圓五十錢)●天切名目十四匁廻り(十圓ヵ十圓二十錢)●大玉本〆十二匁(八圓四十錢、八圓五十錢)●同名目十二匁廻(八圓ヵ八圓二十錢)●中玉上、並(七圓三十錢ヵ七圓)●並玉上、下(六圓五十錢ヵ六圓八十錢)●上海玉三百六十ヵ四百個圓一函に付三圓ヵ三圓十錢

◎乾海苔　は何分大豐收なるが爲め大安、併し上物は割に廉からず、中以下は大安價なり百枚の大相場を詳しく擧ぐれば、

●洲崎極上々六十五錢●同上々五十錢●同上四十錢●同中三十五錢●同下二十五錢●大森上六十錢●同上々五十錢●同上三十五錢●同中廿五錢●同下五錢ヵ十三錢●大師潮田極上々四十五錢●同上々三十五錢●同上三十錢●同中十八錢●同下五錢ヵ十錢●深川砂村極上六十五錢●同上々五十錢●同上四十錢●同中三十錢●同下廿錢●上總極上四十錢●同上三十錢●同中十五錢●同下六錢

◎石油　大相場も餘り變動なければ小相場も同樣大相場一函直段、●上ホウキ(一圓六十二錢ヵ一圓六十三錢)●二番同(一圓五十九錢)●上月ロシヤ(品切)●上錨ロシヤ(一圓五十五錢ヵ一圓五十七錢)●チャスタ(一圓五十七錢ヵ一圓五十八錢)

雜　錄

遺　珠　顆　々

立てる職工は座せる紳士よりも高し　　古　諺

すべて保ち得可き健康を保つは職分なり
すべて避け得可き疾病に罹るは罪惡なり　　逸　氏　名

恐るゝことを知らざる者は勇氣を知らず　　アボット

良工は道具と喧嘩をなさず　　バイロン

或者は汝を惡まん或者は汝を愛せん或者は訳ひ或者は輕んぜむ人間を離れて天を仰ぎ上帝を信じて正を踏め　　古　詩

女　學　校

其一　東都私立學校(承前)

東京女學館

東京女學館は麴町區永田町に在り、親王殿下を會長と戴ける女子教育奬勵會の學校なり。貴族的女學校にして、日本婦人をして歐米婦人の享有する所と同等の教育及家庭の訓練を受けしむるを目的とせり。」普通科に於て本邦語學史學及ひ文學は本邦學士擔當し、史學外國文學理化學數學は英語を以て教授す。而して音樂圖畫衛生法裁縫縫箔看護法舞踏及ひ躰操の如き實地の技術に係るものは特別學科として之を授くるなり。

即ち普通科に於て、豫科三年、國語英語算術理學地理歷史佛語若くは獨逸語指物科學唱歌裁縫運動躰操舞踏撰科(音樂圖畫日本裁縫挿花術)を授け、本科二年、國語日本及ひ支那の歷史等漢文英語佛語若くは獨逸語歐洲歷史理學(動植物學物理學化學生理學)幾何學代數學音樂撰科（圖畫彩色縫箔割烹看護術家内經濟衛生學生理學日本裁縫挿花術）を教ゆ。

特別科は夫人の爲に設け、毎週火曜日午前九時より正午十二時まで簡易割烹及ひ病室割烹を教授し、毎週月曜日午后二時より四時まで裁縫を教ゆるなり。

滿十一歲以上入學を許す。

學費は

一授業料　毎月金壹圓五拾錢
一寄宿料　毎月金拾五圓
一通學生晝食（但し隨意）　一日金拾五錢
一書籍、給具、筆、紙、墨等は凡て生徒の自辨たるべし

而して寄宿生の館内の生活は英國中等以上の社會の風に則らしむなり。」又館内に倶樂部あり、婦人の交際を增進し、學館定規の課程を履む能はさる婦人に勉學の機會を與ふ。

海岸女學校

は京橋區築地十三番館に在り、米國美以美教會の女子外國傳道會社が立る所なり。東京英和女學校に入るの豫備をなすもの。

全科六年。

學費は

束脩　金貳圓
授業料　一ヶ月分　金壹圓
食料　仝　金三圓
ピアノ授業料　仝　金貳圓
オーガン授業料　仝　金壹圓
書籍借用料　仝　金貳拾五錢
諸雜費　仝　金五拾錢

跡見女學校

跡見女學校は明治八年の創立にして今小石川區小石川柳町廿七番地にあり。本邦淑女の令德を養成し、且日常必要なる學藝技術を教授するさの目的を以て成れり。

教科は

和漢學　素讀、講義、輪講、和歌、和漢作文、習字、
英語學　讀方、譯讀、綴字、書取、習字、會話、作文、文典、地理、歷史、小說、經濟、
數學　算術、代數、幾何、
繪畫
裁縫附編物
點茶、音樂、生花、

而して望に依り一科若くは數科全科を教ゆるなり。
寄宿を許し、又通學をも許す。
入學者は小學高等科卒業若くは之に相當の力あるもの。
學期は四年なり。
左の學費を要す、

一束脩　金壹圓五拾錢
一授業料
和漢文學、數學、習字　金壹圓
但し各一課を修むる者は金五拾錢
英語學　金壹圓
習畫　金五拾錢
裁縫編物　金五拾錢
音樂　金七拾五錢
生花　金貳拾五錢
點茶　金貳拾五錢
一食費　金三圓五拾錢
一整費　金五拾錢

而して本年新に豫科を設けぬ、亦四年。

香蘭女學校

香蘭女學校は麻布永坂町一番地なり、明治廿一年三月創設する所。學科を尋常小學科高等學科尋常中學科及ひ高等中學科に分てり。尋常小學科四年、高等小學科及ひ尋常中學科各三年、高等中學科二年。卒業生若くは是と同一の力あるものにして尚高等の學科を修めんとするものゝ為に更に高等科二年を置く。

即ち尋常小學科

修身、英語、國文、珠算、筆算、圖畫、手藝、唱歌、

高等小學科

修身、英語、國文、歷史、理科、地理、筆算、圖畫、手藝、簿記、唱歌、

尋常中學科

修身、英語、國文、漢文、歷史、理科、地理、筆算、簿記、家事、圖畫、手藝、唱歌、

高等中學科

修身、英語、國文、漢文、歷史、理科、地理、筆算、家事、圖畫、手藝、唱歌、

なり。而して高等科は

文學　高尚なる英和漢學講義同く作文論説及ひ詠歌

科學　動植物理化生理衛生　英語講義及ひ實驗

數學及地理　代術代數等及地文天文地理　英語講義

家事　家內經濟西洋調理法及ひ高等西洋裁縫

學費は

一束脩

小學科へ入學の者　金壹圓

中學科、高等科へ入學の者　金貳圓

一授業料

尋常小學科　一ヶ月　金六拾錢

高等小學科　一ヶ月　金八拾錢

中學科　一ヶ月　金壹圓

高等科　一ヶ月　金貳圓

一月俸(寄宿生に限る)　一ヶ月　金三圓

一校費及ひ炭油湯沐費(仝)　一ヶ月　金五拾錢

一一家族にして入學者二人なれは下級の者の月謝貳拾錢を減三人なれは其分三拾錢を減すへし

但し尋常小學科は都て廿錢を減するものとす

右の外音樂を學ふ者は別に音樂料(金壹圓)を納めしむるものとす。

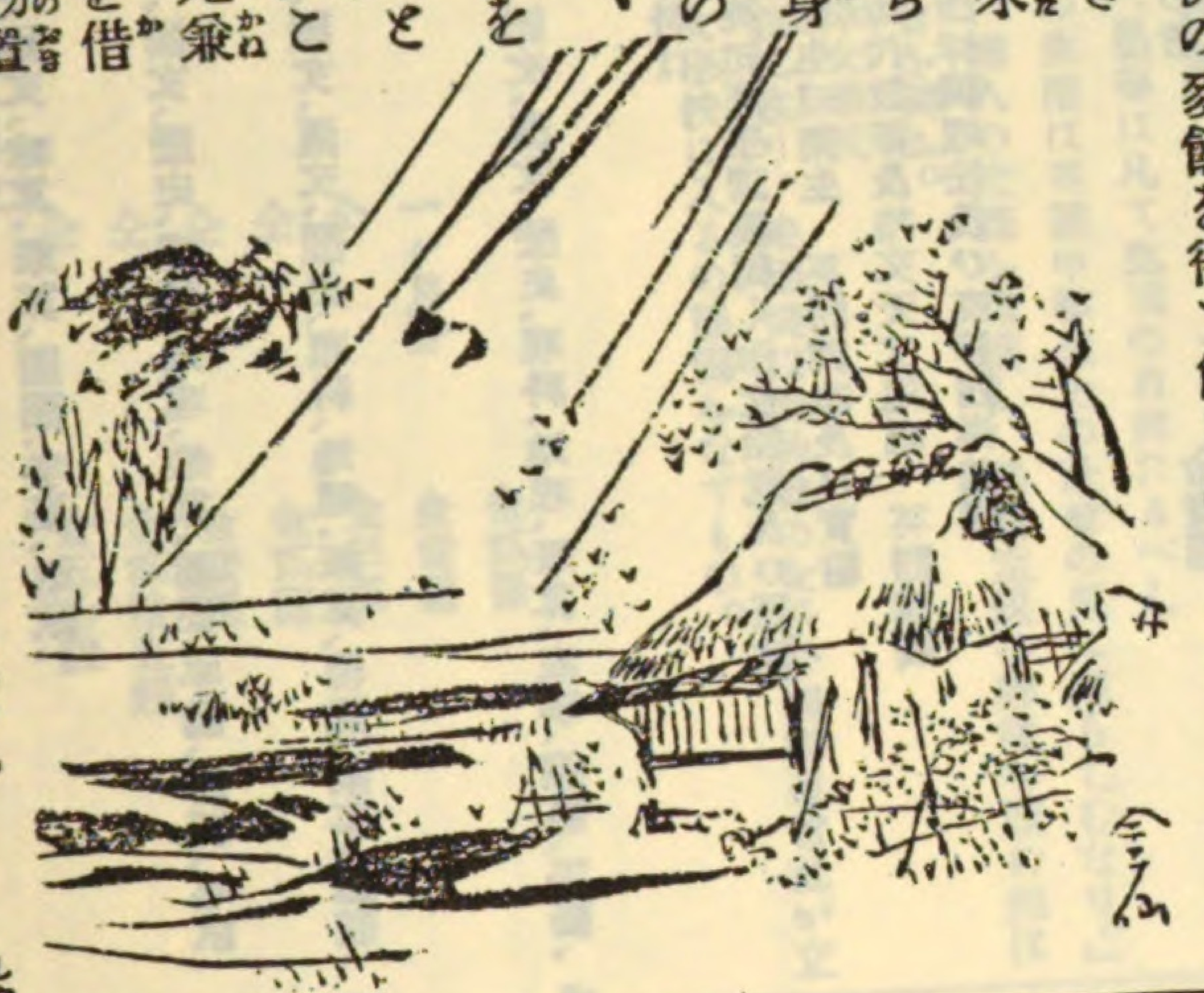
(未完)

家庭小話

第五　乞食

初春の夕暮物寂びし頃、山田の門前にションボリと一人の男立つたり、乞食なり。年齢四十餘、身に薄き衣を纏ふ。顔瘦せて蒼く、眼の水よどみて光朦なり。妻なく子なく親兄弟なく、連れの友もなく、雨を避くるに家なく、眠るに床なく、天地の間唯だ己の肉躰と心情とのみなる此男の如き如何に哀れなるよ。されど之を恤む人は少し。

山田の一家は、情深き人々のみなれば、毎に施を樂む。此男も一椀の麥飯を得て飽きぬ。をりしも黄昏の闇と共に、寒き雨サット降り來る。乞食は立ち去る能はず、身を戰はして門の片隅に蹲踞り、膝頭の間に腮を埋めて眠らんとす。山田の父これを見て、見兼て渠に物置を借しやる。渠物置に入りて後は、鼾さへ立てず、ひつそり眠に就きぬ。蕭々と降る春の夜の雨に和して、寂かにさそふ木綿車の音、樂しげに笑ひ語ふ聲、母家に方りて聞ゆ、乞食の耳に入りしや否や。



夜明けたれど雨少しも止まず、益々強く降りしきりて、風亦や〻加はり、山の松淒く鳴りて、軒端の雨滴の音あやしく亂る。

太郎は風雨を衝て登校し、父、母、姉、下女悉く屋外の業につく能はず、家に籠りて各其の務に從事す。源二も今日は野に働くと叶はず、物置に來りて米を舂く。乞食又たもや立ち出る能はず、三度の食を餬ひ、源二が勇ましく唄ふて米舂く樣を、傍より只だ茫然と眺めて日を暮しぬ。此夜、母家の方に太郎が讀書の聲、鶴の謠　笑ひどよめく聲、風のまに〳〵物置まで聞ゆ。眞暗のうちに獨り藁を席て臥す乞食、之を聽て頻りに嘆息し、躰を顫はして泣きぬ。

次の日、雨小降りとなりたれど風愈々烈しく物すごきと言ふ計りなし。山田の人々悉く外に出で、垣に棒を支へ、花草に竹をかゆるなど、ビショ濡れとなりて立働く、暫くして皆内に入りて各業に從ふ。源二物置に來り、米舂き唄ふと昨日の如し。かの乞食今日も立ち去らず、三食を餬ひ、默然と源二の仕事を眺めて暮し

ぬ。源二物置を立ち去る時、渠に問ふていふ、『妻も子も、兄弟もなきや』と。

渠愀然として答ていふ、『兄弟は皆な死絶へぬ、妻も子もありたり、されど今は四散して其の行衛を知らず』と。

源二いふ、『何故に自ら働きて活きざるや』。

乞食は頭を下げて默す。源二いふ『汝知らざる可からず、汝が餬ふて食ふ飯米は、其の一粒も悉く吾等の汗なることを』。

かく言ひ捨てゝゆく武骨なる源二の後姿を見送りて、乞食はほろりと涙を落しぬ。

夜に入りて雨止み、風も亦た止み、闃然として天地靜かなり。母家に方りて、昨夜よりも一層明了に笑ふ聲、語らふ聲、如何にも面白げに、如何にも樂しげに聞ゆ、乞食默然と聽ておりしか、冷やかなる涙は渠の蒼ざめし頬をつたひ、戰慄く唇より『妻よ子よ、何所に』と幽かに漏らしぬ。

次の日太郎物置に來り見るに、乞食在らず、其處彼處と探せども終に見へずなりぬ。

談叢

寸蛇

蛇は一寸にして其氣を吐くと謂へり、人の一生は稚な遊びの中にても卜せらるべし。世の父母たらんものは其子女のたわいなき遊びによく〳〵心し、幾微の間に彼等が性癖嗜好を見出して、之を導き之を長じ、天晴れ一個の大人物となし上んこと尤も肝要の事なり。

昔虎よりも猛くして一代を震慴せしめたる甲斐の武田大膳太夫信玄が、まだ稚くて勝千代君とかしづかれまゐらせし頃なりけん、一日彼は其母より彼が最愛の遊伴として手遊の貝を數多與へられき。

彼は其數多きを喜んで之を乳母にも附從のものにも誇示し、曰へり『此貝幾何かあるべき』。

『さればなり一萬もありなん』『いな〳〵一萬五六千は候ふべし』『いやとよ二萬にも及びつべし』。人々の答へは樣々なりき。

小主人は自ら其數をかぞへぬ、而して實に五千には過ぎざりき。

彼は因て之を排列し始めたり、横に、縦に、此處に、

又彼處に。

而して人を呼て其數を言ひあてしめ、排置を更めては又之を試み、萬變千變して之を試むるに一人の一萬より少なからんと言ふはあらざりける。

彼大に喜んで曰く、『我れ他日人となりて弓矢を取らんに、五千の人數あらば、如何樣にも陣立して、多寡心のまゝに振舞ふべし。今人々はさしもの勇士にてありながら、五千の貝を見切る能はざるは、五千の備を見定め得ぬと覺えたり。さて〳〵笑止の事ども哉』と。

老臣等因て皆舌を捲て恐れける。

異時縱横自在に備ぬる彼が排陣の雛形は實に此の貝にてやありけん。

大　膽

大胆の中には才力あり妙法ありと聞きぬ。

去れば何事にまれ之を擇ぶには深き慮も遠き謀も入るべけれど、一旦彼をやせん此をやせまじなど思ひ定めたる上は、いかり猪の如くひた進みに進みて復た顧みぬこそ却てよけれ。唯大胆に之をなしたらんには、一種の輕き翼を有てる才力或は妙法などいへる天使は忽ち汝が眼前に翺翔し來て汝の旅を導くべし。蓋し成功の秘訣は最も多く大胆の中に住へば。

黑田如水といつぱ、文祿慶長の頃智謀第一の人と聞え、又剛氣の大將なりと稱へられしものなり。

去れども鬼神を欺く力も無常の風や避け得ざりけん、慶長九年彌生半ばに六十九年を一期として九州の花武者も將に散りなんとせし時、其子甲斐守長政を近く喚び、紫の袱もて包めるものを與へしが披き見れば草履片足に木履片足なりけり。さて言へる樣『軍は萬死に入りて一生を得る習なれば十全を思慮しては叶ふまじ。譬ば草履と木履とをはきたるが如く、二つ物かけの軍をすると心得られよ。汝は才智勝れて先きの事を料る故に、大功をなすことはゆめ〳〵叶ふまじ』と。

必ずしも軍のみ然るにはあらぬぞかし。事業と死とを二つかけして、死せずば事をなすべく、事を成さずば死すべしと覺悟し、さて始めて世に大成功は見らるゝなり。

而して如水が長政を呼て『汝は才智勝れて先きの事を料る故に大功をなすこと叶ふまじ』と謂ひしは、流石に

智言と謂ふべし、差し先見は人をして時に臆病ならしむることあり。徳富蘇峰氏の革命家を論じて『彼等は餘りに眼の人なるべからず』と謂へりしも亦同じ意乎。其意同じ。

音樂

僊華琴

僊華、四羅訥治

第二、搆造



(一)僊華琴　僊華琴は其概形琵琶に似て総長二尺五寸あり。胴は月琴の如く圓く、黒き漆を塗り、金泥を以て登龍降龍或は花鳥を卷繪し、胴板の表面は姫小松を用ゐて中央に音洞を貫き、之に彫刻の装飾を附け、裏板は虎皮の栃板又は姫小松を張る。糸留なる下駒は象牙を以て飾りたる黒檀又は黄楊木を用ゐ、律枕は音階を見分け易らしめん爲め象牙と黒檀とを以て黒白を分ちたり。棹は紫檀、黒檀、其他樫等の堅木を用ゐ、糸巻は重に黒檀を用ゐるなり。

(二)僊華琴の絃　絃は四絃にして第一は銀線なり。第二第三第四は羊腸絃或は絹糸にて、其色は白、飴、緑、黄等の數種あり。

(三)僊華琴の撥　撥は圖に記せる如く、其狀恰も琉球三絃の撥又は雅樂琵琶の撥に似て、長け短く且重量あり、而して絃に當る兩端には象牙を張れり。一方には鳩目の穴ありて、此穴には飾房を通ずるものなり。其用法は右方凹處の極端に拇を當て、之に力を入れて拇を張り、左方の凹處をは四本の指にて之を握り、小指の尖二節目が外則に顯れ見ゆる樣に搆ゆるなり。又撥先の絃に當る象牙の部分は永く彈くに從ひ絃と象牙と軋る故に、象牙の磨滅するのみならず、軋々たる音

を發すれば自然聞苦しく、此軋聲を防ぐには生蠟を少し塗るなり。

(四)僊華琴の袋　袋は金襴、錦、輪子、緞子等總て裏を附け、琴の長さより五六寸長く、一方口に作り、琴を入れ其五六寸なる餘りを折返し、棹の中程に當る所を兩端に房を附けたる太き絹の組紐を以て縛るなり。

第三、調絃方

調絃法は「バイオリン」の調絃と同じくして、其第一絃は(G)即ち(ト)音、第二絃は(D)即ち(ニ)音、第三絃は(A)(イ)音、第四は(F)即ち(ホ)音に作る。故に其音階旋律共に「バイオリン」の調絃法に異なる所なし。故に總て唱歌の曲譜幷に進行曲蹀踏曲其他の譜曲皆「バイオリン」の彈法と同じく、但彈ずると搊るとの別あるのみ、其運指の順序等毫も異なる所なし。絃の配置幷に律名は左の如し。

第四絃	第三絃	第二絃	第一絃
(ホ)平調	(イ)黄鐘	(ニ)一越	(ト)雙調
(ヘ)勝絶	井b鸞鏡	井b斷金	井b鳧鐘
井b下無	(ロ)盤渉	(ホ)平調	(イ)黄鐘
(ト)雙調	(ハ)神仙	(ヘ)勝絶	井b鸞鏡
井b鳧鐘	井b上無	井b下無	(ロ)盤渉
(イ)黄鐘	(ニ)壹越	(ト)雙調	(ハ)神仙
井b	井b	井b	井b
(ロ)	(ホ)	(イ)	(ニ)
(ハ)	(ヘ)	井b	井b
井b	井b	(ロ)	(ホ)
(ニ)	(ト)	(ハ)	(ヘ)
井b	井b	井b	井b
(ホ)	(イ)	(ニ)	(ト)
(ヘ)			
井b			
(ト)			

同く支那樂に用ゆる調絃法　明淸樂に合す時は素より「バイオリン」調絃法の儘にて、律徵さへ探り得れば調絃を變更せざるも彈じ得らるゝは勿論なれ共、若し「バイオリン」調絃法を知らざる時は、第一なる銀絃を(合)に合せ、第二絃を(尺)に、第三絃を(又合)に、第四を(上)に合すれば、取りも直さず琵琶の調と同じくなるなり。特に細き糸なる第四絃の第三枕目を押へて四絃を併せ彈すれば合、尺、合、伬なる和音となり、又同絃の上駒より第八枕目を押して四絃を併せ彈ずれば合尺合伬の和音と成る。故に明淸樂の樂曲を彈ずるには毫も琵琶の彈法に異なる所なし。其他俗樂調の簡便なる調絃法あれども今茲に略す、左に明淸樂を彈ずるに便利なる調絃法を掲ぐべし、

第四	第三	第二	第一
尺	合	尺	合
工	四	工	四
凡		凡	乙
	乙		
合	仩	合	上
四	伬	四	尺
乙		乙	
	仩		工

斯くの如く調絃の變換も自由なるを以て、歐洲樂曲は

云ふに及はず、箏、尺八、三絃其他清樂等に合奏し、且つ一樂にして東西兩洋の樂曲を彈じ得らるゝ一擧兩得のものたり。又此僊華琴に伴奏する樂器はバイオリン、テナー、セロ、フリート、クラリチツト等なり。（未完）

時事一斑

閣龍世界博覽會

は本月一日を以て開會せり。在シカゴ市本邦事務官手島精一氏日本政府に報ずらく『本月一日米國大統領クリブランド閣下は、閣龍世界博覽會に臨んで開會式を擧行し、豫め準備したる一の鈕を推し、以て會場內の全機械を一齊に運轉せしめ、當日非常の盛况を極めたり』と。

朝鮮の警報

四月下旬は朝鮮に東學黨と呼べる一種の宗徒が亂をなすべしなど噂ありしが、竟に事なくして止みぬ。

敎育と宗敎の衝突

一時物議に上りし井上哲次郎氏の『敎育と宗敎の衝突』は訂正せられて世に出でしが、科學思想ある人の言とも覺へず、議するまでもなきなり。

長崎何ぞ怪報の多きや

曩日怪報長崎より來りて世に喧しかりしは人の記臆する所なるべし。今は又傳ふ、米國代理監視官フランクチヴィルス、醜業をなさしめんが爲に未丁年の日本女子を海外に誘ふを以て拘留せられ、本日は是れ其審判日なりと。

春日徒に遲々

霜降る、關東の野桑に葉なし。春日徒に遲々。

行樂

今日のみと春を思はぬ時だにも、たつことやすき花の影は、上野墨田の夢も覺めて、ぬぎ更ふる花の袂の移り香忍ばしく、三春の行樂今は唯青葉のみ殘りける。」羅根の草も色深くなりぬ。太平時節英雄懶。人は春の行衛を尋ねて、五月の野邊を廻るなるべし。或は頃過ぎ、或は未なる藤、牡丹、躑躅、芍藥、椿、卯の花。



東都の藤の花は、龜戸天神あり。小日向茗荷谷の藤寺あり。呉竹の根岸の里の藤寺あり。芝公園の辨財天あり。ア、『いつしかと藤さく池の水鏡、うつりにけりな春の日數は』。庭いつぱいに國香芳ばしき牡丹の花は目黒、淺草花屋敷、本所四つ目の植文、大久保の萬花園、行德舟橋の間なる妙王寺、淺草田圃の半花園、新宿の薮屋敷。薮屋敷は地閑に園廣く、牡丹の葩を三杯酢にて調理したるを出すべし。何等の風流ぞ。躑躅は、花の數さへ大久保、かねて聞く音羽の護國寺、日暮里、根津神社、上野穴稻荷。

芍藥は堀切、本所四つ目植文、染井邊よろし。谷中の福聚山海藏寺、行德舟橋間の葛飾明神、寶成寺は、いづれも木古りにし八千代の色の玉椿あり。叉浪の花打寄せしかとも見ゆる玉川の岸の卯の花も面白かるべし。小金井、奧澤の九品佛邊、亦『ひまもなく里の卯の花咲きにけり、とはん垣根も道見えぬまで』。薔薇亦花さく。花に清香あり月に陰ある春の宵は今は過ぎぬれども、風の清き青葉の影を庭にうつして、さら〳〵と流れ行く小川の岸の蘋のかげに、金魚なとの躍るかとも思ぼしき夏の夜は來ぬ。郭公〳〵とて幾夜をか明かしぬるも多かるべし。郭公は上野、王子、根津、根岸、小石川、御茶水、芝公園、白山、橋場、向島。



廿一日は大師河原の參詣あり。

明治廿五年九月十四日遞信省認可

牛乳に勝る滋養品

弊舗ヘルスの儀は兼ねて醫學博士醫學士各地方病院長及び世に聲望ある醫士諸君等三百餘名の御賛評を蒙り大に明治今日の醫學社會に喝采を博したることは世人の既に知る所なゝ弊舗之光榮實に不過之然るに今回醫學博士諸先生の指導に基づき大改良を加へ學理に徵して適當の滋養料なることを確認せられ益々𠎝勉世の需用者をして滿足せしめん

ヘルス

ヘルス定價

六合分	十六錢	郵税二錢
一升二合分	廿八錢	郵税二錢
三升分	六十五錢	郵税四錢
六升分	一圓廿錢	郵税八錢

「ヘルス」は美麗堅牢の鑵詰にして殊に佳良香味を有し携帶に便なれは日々の保養飲料は勿論陸海軍用旅行航海糧等には頗ろ適當なり且高尚なる進呈品によろし●ヘルスは日本全國有名なゝ藥種屋賣藥商洋酒屋鑵詰屋料理店雜貨店宿屋等に賣捌せり●市内は配達す

ヘルスは賣藥に非す取次をなすに面倒なし未だ取次なき所は至急申込あれ規則書を送附すべし

備考

「ヘルス」七倍の沸湯を以て溶解したる者なり又生牛乳の乾酪質と蛋白質とを合して含窒物とし牛酪を以て脂肪とし乳糖を以て無窒素物とし鹽類及固形分を以て無機物としたる者なり

●江馬氏は弊舗「ヘルス」を動物に試驗し其の成績を報ぜられたり載せて醫海時報》五號にあり

賛辭の例

日本一の滋養品腐敗變味の憂なく

● 山龍堂病院長 醫學博士 樫村清德君の評

貴店製造の「ヘルス」は實驗日尚淺しと雖も蛋白質に富み消化容易にして頗ろ滋養に適する者と信す

● 海軍々醫總監 慈惠醫院長從四位 高木兼寛君の評

貴舗製造の「ヘルス」は滋養分に富み飲用し易きを以て患者は勿論無病者と雖も之を服用すれば其健康に大なる稗益あるものと認む

●効能

身體の薄弱なる人、過度に精神を勞する人、婦人產前產後、記憶力の弱き人、忍耐力の乏しき人、氣力減乏、貧血萎黃症、諸病の衰弱、過淫より來ろ衰弱、諸出血より來ろ衰弱、病後の恢復期等に効顯著なり又肺病胃病患者に最良の滋養飲料たるとは諸大醫の實驗證明せらるゝ所なり

東京市内は配達す●遠國御注文の節代金は爲替にて三井銀行或は神田郵便局に振込あれ●郵券代用は一割増し（但し郵券は二錢に限ろ）

大阪市中は支店に於て配達す●遠國御注文は爲替にて大坂順慶町郵便局又は三井銀行へ振込あれ●郵券代用一割増

ヘルス發賣元

東京神田區鍛冶町（大通）

Ⓜ森田商店

（電話千八十二番）

大阪心齋橋筋南久太郎町北へ入

Ⓜ森田支店

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍印行